

チェックリストによる公共図書館蔵書分析評価法
Measurement of Public Library Book Collections
by Check List Methods

河 井 弘

Hiroshi Kawai

Résumé

For evaluating library book collections there are three ways: (1) numerical measures of the quality of the book collection, (2) proportional analysis of the book collection, and (3) analysis of the book collection by means of check lists.

The author of this theses, in order to find out a most adequate means of or approach to evaluating public library collections in Japan, has tried to cover as comprehensively as possible best examples in the past carried out in the library surveys in the United States of America. Particularly works done by Leon Carnovsky—his articles and reports on the surveys—have been very carefully studied in detail.

Consequently the author has stated eleven view points that signify advantages and disadvantages of the method by the analysis of the book collection by means of check lists. This may be the most comprehensive study on the subject in Japanese.

“個々の書物は、個人の精神的諸関係のみを伝えるが、無数の主体的精神活動より発しながらなお一つの超個人的な大をなす客観的精神は、ただ図書館という形でのみ現存する” (P・カールシュテット)。

ここにいう図書館とは図書館蔵書である。すなわち図書館は、社会の知的精神的活動を集積して、蔵書という一つの有機的全体を構成し、この蔵書全体をもって社会に働きかけ、新たな知的精神的活動を促がす任務を負うものである。いわば、蔵書が図書館の社会的役割を決定し、その存在意義を確立する。したがって、蔵書がどこまで充実しているか、図書館に課せられた役割をどの程度に果たしているか、利用者の要求をどれだけ満たしているか、他の図書館の蔵書とくらべてどのような特色をもっ

ているか、などを知ることは、図書館の存在理由を確認するに等しい重要な課題である。ここに蔵書構成の分析評価の意義がある。

しかし、日頃蔵書に直接ふれていても、蔵書全体の充実度や特質を把握するのはしかく容易ではない。書架を一巡すれば大体の様子がわかる小図書館でも、改めて蔵書構成全体について厳密に訊されると、的確な結論を示すことは困難になる。まして大規模な書庫を持つ大図書館では、経験的に全体の構成を理解することは不可能に近い。したがってこれまで、蔵書構成の分析評価のための特別な方法が種々講じられてきた。

その一つに、アメリカでさかんに使用されているチェックリスト法がある。これは、ある標準的な図書リスト

河井 弘： 元東京大学教育学部助手，現在ドイツ留学中。

Hiroshi Kawai, formerly Teaching Assistant of the Faculty of Education, University of Tokyo, presently studying abroad in Germany.

を用いて蔵書をチェックし、リスト所収タイトルを図書館がどの程度所蔵しているかを調べて、蔵書の充実度を測り、特質を見極め、構造的分析を加えようとする方法である。すでにアメリカの図書館では、この方法による調査例が数多く報告されている。むろんこれとても数々の限界をもち、この方法のみで蔵書を十分に分析評価しうるとはいえないが、現在行なわれている各種の方法の中では、最も具体性をもっているということではある。

わが国でも蔵書構成の分析評価の必要性が認められてからすでに久しいが、まだ決定的な方法を見出すにいたっていないように思われる。そこで本稿では、特にチェックリスト法を取りあげて、蔵書構成分析評価が最も困難だといわれている公共図書館の場合で、アメリカの調査例、諸見解にもとづきつつ、その可能性を追求してみることとする。しかしそのアメリカでも、調査分析評価の技術的な点では、調査者によって著るしい差違があり、必ずしも統一的方法が定着しているとはいえないので、ここでは多くの調査例に見られる方法を網羅的に検討し、のちの定式化のためのキーポイントをたしかめておきたい。

1.

蔵書の分析評価には、チェックリスト法に限らず、様々な方法が数多くの人々によって適用されてきた。これらは諸家によってある程度分類整理されている。したがってチェックリスト法の説明に入るまえに、公共図書館を含む各種図書館に共通する蔵書分析評価法の種類について考察し、チェックリスト法独自の意義を他の方法との関係で大略とらえておくことにする。

マックダイアミッド(Errett Weir McDiarmid, Jr.)は、“図書館調査”の中で、1. 蔵書量の数的評価法(numerical measures of the quantity of the book collection)、2. 蔵書比率分析法(proportional analysis of the book collection)、3. チェックリストによる蔵書分析法(analysis of the book collection by means of check lists)の3種の蔵書分析評価法を挙げている。1はいうまでもなく蔵書冊数を示して、図書館間でその多少を比較したり、同一図書館の蔵書冊数の年度別変動状態を検討する方法で、図書館案内、各種報告、調査などで頻繁に使用されている。またこの蔵書総冊数が、他の図書館調査における図書館の規模別分類の基準にされることもある。

2は、全蔵書を、成人図書・児童図書・特殊集書・一般図書・郷土資料の各種類別に分類して、種類別冊数、

全蔵書に対する比率を示したり、あるいは主題部門別、分類別の冊数・配分比率の形であらわす方法である。この方法によれば、各館の蔵書の、充実した部門、分野と、比較的ウィークな分野がわかり、蔵書全体の構造的特質、さらには図書館の特質を容易に理解することができる。図書館の蔵書統計は通常この方法で作成されているので、比較分析もこのデータにもとづいて行なわれることが多い。

3は、分析しようとする蔵書の特徴、種類によって、適当な標準図書リスト(Standard list)を準備し、これをもって対象館の目録をチェックして、リスト所収タイトル中、図書館の所蔵するタイトルを調査し、所蔵数、あるいはリスト中の総タイトル数に対する所蔵タイトル数の比率を計算する方法である。この場合、所蔵率の大小によって蔵書の質的評価をくだすことも可能だし、リストの性格と関連づけて蔵書の特徴を判断する資料とすることもできる。本稿は特にこの方法を詳しく検討しようとするものである[27: 100ff]。¹⁾

カーノフスキー(Leon Carnovsky)は、図書館サービス評価法(measurement in library service)一般について、相互比較法(comparative method)と標準比較法を区別している。前者はマックダイアミッドの1にほぼ該当するが、彼によれば、これは何ら客観的な規準を示すものではなく、却って各館独自の目的を忘れて互いに量を競い合う結果になる傾向がある。したがって彼自身は客観的標準(objective standards)と比較して蔵書の質的水準、充実度を評価する方法によるべきだと考え、チェックリスト法を勧めている[8: 240-41]。また別の論文では、公共図書館蔵書評価法(measurement of public library book collection)を、量的(quantitative)方法と質的(qualitative)方法に2分している。多くの調査例をみるとこの両方法の区別は必ずしも明瞭でなく、同じ方法を両面から使いわけられることも可能な場合もあるが、彼は一応、マックダイアミッドの1と2を前者、3を後者とみなしている[14: 462-3]。²⁾

ハーシュ(Rudolph Hirsch)は4種の評価法を挙げている。第1は“図書館のポリシーと目的によって”蔵書の評価する方法で、評価担当者の、出版事情や書誌類に関する該博な文献的知識に依存する。多くの場合、図書館員や文献通の人が担当し、スペシャリストの助言でこれを補っているが、あくまで“主観的・相対的”“印象主義的方法”(impressionistic method)だといわねばならない。第2の方法はチェックリスト法である。

第3は、“利用によって”蔵書の評価する方法で、利用数が評価の基準とされる。彼は“利用は相対的・数量的価値”であるとの見方をとり、評価の客観性の点で前2者よりすぐれているとみなしている。むしろここでいう価値は有益性 (usefulness) であり、文献的・本質的価値 (intrinsic value) と区別されるべき相対的価値、あるいは使用価値である。²⁾ この方法のいま1つの利点は、全蔵書に対する全利用数、あるいは1冊当たり平均利用数 (average per volume circulation) が計算できることである。これによって蔵書の回転率を知り、図書館サービスの機動性を評価することができる。また、知的価値 (intellectual value) と利用、利用上の価値との関係は弱く、すぐれた図書が多く読まれるとは限らず、逆に低俗な図書が広く読まれる傾向があるので、利用との関係におけるこの評価法によって、他の評価法の結果を検証する必要がある。

最後に、図書資料費面からの評価法がある。一般に、図書費総額を他の図書館や諸機関と比較したり、図書費の種類別、部門別、分類別配分比率を計算して、各館の図書購入をコントロールする方法が行なわれている。特に図書費の他館との比較は屢々行なわれるところであるが、殆んどすべての出版物を購入しうるほど十分な図書費を与えられている館と、必要最少限度の図書すら満足に購入しえない館では、選択技術や蔵書構成方針の如何に拘わりなく、蔵書に決定的な差が生ずるので、最も基礎的分析基準だといわねばならない。ただこれはあくまで“純然たる量的アプローチ”であり、これによって蔵書の質や性格をきめこまかに分析することはできない[37: 7-20]。

ウィリアムス (Edwin E. Williams) は、蔵書調査の目的を、1. 1館の蔵書に関するデータを収集、組織化し、学者に配布して、蔵書の改善をはかること、2. 多館調査 (multi-library survey) によって、収集の主題分担、相互協力を推進すること、の2点におき、調査方法を、1. 規模、2. 蔵書のバランス、3. 利用、4. チェックリスト、5. 点検、の5種に分かって詳説している。

彼のあげる5つの調査方法のうち、1はマックダイアミッドの1、2は2、4は3に該当し、3はハーシュの3にあたる。5は、調査者が書庫へ入って書架を一々点検し、蔵書の質・量・配分などを実物に接しながら検討する方法で、調査者の豊富な経験と鋭い観察力を必要とする。それだけに調査方法としては“非科学的”で、とくに取り上げて論じられることは少ないと述べている

が、事実、点検は大抵書庫・蔵書管理法の一とみなされているようである。経験・直観に依存する点はたしかに文字や数字によって分析する他の方法にくらべると“科学性”に乏しく、調査者によって分析評価の結果がちがってくる可能性が強いが、調査方法の一に加えられるべきことにかわりはない。ハーシュの1の方法と結びつけることができよう。

また彼が調査目的に結びつけた1館調査と多館調査は調査方法とも密接な関係をもっている。多館調査の目的を主題分担・相互協力にしているが、多館調査が必然的に主題分担へ向かうわけではなく、のちにみるように、逆に多館の同質化を目指す場合もある。また相互協力の期待しえない広域の多館調査も実施されているが、その目的は言うまでもなく図書館相互の比較にある。詳しくはチェックリスト法の場合で論ずることにして、ここでは、1館調査と多館調査という、調査対象の数による方法の区分が考えられることを示すにとどめておく[42: 24-32]。

堀内郁子氏は大学図書館の蔵書評価法として6種類あげている。その1は、図書館員や学識経験者による蔵書点検、2はチェックリスト法、3は集書の“程度”をたしかめること、4は利用状態を規準とする評価、5は利用者の請求、相互貸借のタイトルの記録によるチェック、6は図書資料費による評価である。このうち、1、2、4、6はそれぞれハーシュの1、2、3、4、に該当し、説明内容からみてもこれを参考にしたもののようである。3はコロンビア大学の図書館調査の際に設定された5段階の蔵書の類型との対比法であり、5は、要求されたタイトルが所蔵されていなかった場合を記録にとどめておき、のちにこれらのタイトルの購入の可否を検討する方法である。³⁾

以上のこれまで論じられてきた諸方法を整理すると、次の9種類に要約できる。

1. 蔵書資料総数 増減の動向、他館との比較、規準との比較、奉仕人口との比較など
2. 種類別蔵書資料数 成人・児童別、一般図書・特殊集書・地方資料別、フィクション・ノンフィクション別、図書・逐次刊行物・パンフレット別 (形態別)、読書資料・視聴覚資料別など
3. 主題別蔵書資料数 分類表、主題部門、その他の主題分類による主題別蔵書資料数、蔵書資料比率
4. 図書資料費 a. 総額 増減の動向、他館との比較、基準との比較、奉仕人口との比較、図書館総経費に対する比率など、b. 配分 蔵書資料の種類別

配分, 主題部門別配分など。

5. チェックリスト法 各種の標準図書による蔵書のチェック
 6. 蔵書点検 エクspertや学識経験者による蔵書の点検調査
 7. 利用との比較 蔵書統計と利用統計の比較による評価
 8. Desiderata との対照 購入希望, あるいは利用希望タイトルのリストによる蔵書再評価
 9. 蔵書類型との対比 いくつかの蔵書の類型を設定し, 各館の蔵書がどの類型に該当するかを検討
- 大まかにいえば, この9方法のうち1-4はカーノフスキーのいわゆる量的分析, 5-8は質的分析にあたり, 9は総合的分析である。しかし同じく質的分析といっても, 5と6は蔵書の文献的価値, あるいは本質的価値による分析評価であるが, 7と8は利用者の側からみた使用価値, あるいは相対的価値による分析評価法であり, アプローチのしかた, 着眼点を異にしている。この他に, ウェラードによって提起されている読書関心調査の結果と蔵書構成との比較による分析評価法も考えられるが, 応用例の有無がわからないので, ここでは特にとりあげないことにする。⁸⁾

ハーシュも述べているように, これらの諸方法のいずれも, 単独に使用して完全な蔵書分析評価を成就しうるものではなく, 蔵書の総合的・立体的分析評価のためには, 2〜3の, あるいはすべての方法が併用されなければならない。本論で詳論しようとするチェックリスト法は, このうちの, 文献的価値の面からみた質的評価法の一つであるにすぎない。

なお, 人により, 見方によって, 蔵書の“調査”(survey), “分析”(analysis), “評価”(evaluation, measurement)など種々の用語が使われているが, その概念は同一ではない。最も多く使われている“評価”は, すなわち価値の決定であり, 当然その背後に蔵書構成の“改善”の意図がある。これに対して“分析”とは, 原則的には没価値的判断であり, 蔵書の構造的特質を追い, その背後の論理を探求することである。むしろ分析の結果が蔵書の改善につらなる場合が多く, 一般には経営分析の一環として蔵書分析が要請されているが, それは分析の潜在的・副次的意義にすぎず, 分析そのものは設価値的操作であることを確認しておく必要がある。一方“調査”は, 分析と同様本質的には設価値的概念であり, 社会科学の“科学化”の方法であり, 調査結果を整理して複数の類型を

設定し, 相互の優劣を全く問わない場合もあるが, 評価的角度から対象に接近して, 価値を決定し, あるいは欠点を指摘するなど, 評価と同一視できる場合もある。むしろ分析と評価の両面を包括した概念とみなすべきであろう。

本論のとり扱うチェックリスト法は, もともと純然たる評価法であったが, その使用法如何では, これによって設価値的な分析を展開することも可能である。その意味では調査法の一つとみなすのが最も無難であるが, 蔵書構成の内容に相当深く喰いこんで要素分析することも可能な方法であるため, あえて分析評価法と呼ぶことにした。本文中ではこの3つの用語は適宜使いわけることにした。

2.

マックダイアミッドの事例紹介をみてもわかるように, チェックリスト法 (checklist method) [14: 468] ははじめ大学図書館の蔵書調査に使われた。カーネギー財団のカレッジ図書館助言団は, カレッジ図書館補助金の支給基準を作成するために, 全米的にカレッジ調査を行なったが, この時はじめてチェックリスト法が使用された。助言団は, 図書館蔵書調査のために, スワースモア・カレッジ図書館長ショー (Charles B. Shaw) にチェックリスト編纂を依頼した。ショーは *ALA Catalog, Booklist* あるいはマジの *Guide to Reference Books*⁵⁾などを参考資料とし, 原案を全国の各分野の専門家に送って意見を求めるなどして, 1930年に完成し,⁶⁾ 助言団がこれを各カレッジへ郵送した。リスト所収の14, 200タイトルは, 大学院生・教員を除くリベラルアーツの学生を対象とする一般的図書から成っている。データ整理と報告書作成には, シカゴ大学図書館学部準教授ランダル (William A. Randall) があたり, 1930年からチェックリストその他のデータの不備を補うために, 各調査館を訪問して現場調査をすすめて, 1932年に結果をまとめて発表した。⁷⁾

ショーのリスト作成と同じ1930年, カリフォルニア大学のヒルトン (Eugen Hilton) は, ジュニア・カレッジ用の基本図書リストを編纂し,⁸⁾ 合衆国教育局がこのリストを使って1933年に教員カレッジ図書館の蔵書調査を行なった。⁹⁾ 1931年には, ポモナ・ジュニア・カレッジの図書館長ヘスター女史 (Edna A. Hester) も同じくジュニア・カレッジ用の基本図書リストを作成した。¹⁰⁾ 1933年にはシカゴ大学図書館が, シカゴ大学調査

の一環として図書館調査を行なったが、その主任となったレイニー館長 (M. Llewelyn Raney) は、尨大な数の文献目録を使用して、チェックリスト法による蔵書分析評価を完遂した [27: 107]。¹¹⁾

大学図書館蔵書調査法として俄然脚光を浴びてきたチェックリスト法を、公共図書館の蔵書調査にはじめて適用したのは、シカゴ図書館学部講師カーノフスキーである。同学部博士課程を修了して、1932年に Ph. D. を取得した彼は、直ちに同学部の講師に任命され、学部に新風を吹きこんだが、翌年シカゴ図書館クラブの依頼を受けて、シカゴ首都圏の公共図書館の総合的実態調査を実施した。このとき採用したのがチェックリスト法である。¹²⁾ ここで彼がチェックリスト法を採用した事情について彼自身は何も説明していないが、同学部のランダル準教授や、同大学のレイニー館長らが、大学図書館調査で実施した方法にヒントをえて、公共図書館調査へ応用したことは疑いを容れない。以後彼の行なった数多くの公共図書館調査のうち、蔵書調査は殆んどすべてチェックリスト法によっている。

調査対象は、シカゴ首都圏所在81の公共図書館のうち、目録不備の2館を除く79館とした。調価用具(measuring instrument) としてのチェックリストは、最初ショーのリストの使用を考慮したが、公共図書館用としては不適当なので [6:287]、これにかえるに、1. ALA Catalog, 1926-1931 (2, 711 タイトル)、2. Booklist, 1932. (226 タイトル)、3. Children's Books, 1926-32. (320 タイトル)、4. A List of Reference Books. (247 タイトル)、5. A List of Selected Non-fiction. (290 タイトル) の5リストをもってした。1と2は両カタログの成人図書すべてから成り、3は同じカタログの児童図書をまとめて1つのリストにしたものである。4と5はいずれも調査のために特別に編纂したリストであるが、前者はマジのリストと、イリノイ州立図書館対外奉仕部編の参考図書リストを参考にし、¹³⁾ 後者は各主題分野のエキスパートの推奨にしたがって作成した。1と2は“学術図書と純然たる娯楽図書の中間”に位する標準的図書から成り [2: 265]、5は、公共図書館がどの程度に高価な図書を所蔵しているかを調べるためのリストとして、5ドル以上の図書のみを収めている。こうして異質なリストを使用することにより、蔵書の様々な側面にメスを入れることが可能となった。また1, 2, 3が1926-32の7年間の出版物を収録していることにより、最もカレントなタイトルの所蔵状態を調査して、“ある地域の住民が、広汎

な主題領域に及ぶ最新の望ましい図書やレファレンス・サービスを受ける可能性がどこまであるか”を追求することができただけでなく、各年度別の所蔵状態を検討することによって、大恐慌期を中心とする時期の、公共図書館の図書収集の動向を知る資料も得られたのである [2: 263-4]。

データの整理分析を、彼は、蔵書構成自体についての考察と、蔵書構成・図書館費・利用傾向の関係の考察とにわけて発表している [2, 3]。前者では、分析の都合上、シカゴ公共図書館本館を除く78館のデータに限り、リスト別に各館の所蔵率を計算し、さらに標準得点 (2-score) に換算してリスト間の所蔵状態を比較している。またリスト中の各タイトルの所蔵館数を一々計算し、図書館群への分布状態について考察している。これらの分析の結果から、彼は、全体として所蔵率が低いこと、のみならず78館の差が甚だ大きいこと、特に群小図書館の数が多く、これが全体のレベルを低下させていることなどの問題点を指摘し、その原因が結局は各館の財政力にあると結論した。したがって第2の分析では、特に図書館費と蔵書構成 (= 所蔵率) の関係の究明に主力が注がれ、蔵書構成と住民の人口の相関関係 ($r=0.63$) よりも、図書館費と蔵書構成の関係の方がはるかに密接であること ($r=0.92$) があきらかにされた [3]、

カーノフスキーの調査と殆んど時期を同じくして、イリノイ州立図書館対外活動部 (Library Extension Division) は、1933年に州内281の公共図書館を対象として、チェックリスト調査を実施し、翌年の全州の総合調査とあわせて調査結果を発表した [21, 22, Cf. 6:293]。

この調査の目的は、公共図書館には当然そなえられるべきだとみなされているタイトルを、各館が現実にとどの程度所蔵しているかを調べて、現状を評価することにあった。使用したリストとタイトル数は次のとおりである。

Adult Classed Books: ALA Catalog, 1926-31. (2, 430), Booklist, 1932. (288), Booklist, 1933. (265) 計 2,983.

Adult Fiction: ALA Catalog, 1926-31. (270), Booklist, 1932. (40), Booklist, 1933. (41) 計 351.

Juvenile Books: ALA Catalog, 1926-31. (300), Booklist, 1932 (44), Booklist, 1933. (45), Children's Books for Home and School Libraries. (310) 計 699.

Reference Collections: Reference Collection for

Small Libraries. (150), ALA Catalog & Booklist
(14) 計 164

Professional Books: Essentials for the Librarian's
Professional Shelf. (63) 計 63.

合計 4,260 タイトル¹⁴⁾

この調査にカーノフスキーが参加したかどうかは分らないが、使用リストに共通のものが多く、分析法にもかなり類似性があるので、両調査の間にはかなり緊密な連絡が保たれていたとみなければならない。特に集計分析をいづれも所蔵率と分布度の両面から行なっていることは、調査分析方法において、何らかの意見の一致があったことを物語っている。ただ本調査では、成人用ノンフィクションとフィクションを分離して別のリストにしていること、図書館員用の図書リストを使ったこと、所蔵率によって級分類して、該当図書館数をあげる度数分布表を作成していること、所蔵率 25% 以下をさらに細分して、累積度数を示していること、別に、人口規模別・所蔵率別の度数分布表を作ったこと、分布度分析はカーノフスキーほど重視していないことなどの特徴があらわれている [22: 54-58]。カーノフスキーは、のちにこの調査の結果をとりあげて、シカゴ首都圏調査の結果と比較した [8: 293]。

1936 年には、カーノフスキーとワイト (Edward A. Wight) が、ニューヨーク州ウエストチェスター・カウンティの 31 の公共図書館と 4 つの分館の総合調査を行なった。これは、同カウンティの政治委員会議長フォルツハイマー (Carl Pfolzheimer) がカーネギーから 5,000 ドルの補助を得て、自らカウンティ調査図書館委員会の議長となり、カーノフスキーらに実施を委嘱したものである。この調査の 1/3 は蔵書調査に充てられ、報告全体の中で“最も興味深く価値のある部分”をなしている。¹⁵⁾

ここでは従来の調査とちがって、ウイルソンの Standard Catalog 1934 を使用した。¹⁶⁾ カタログ全体ではタイトル数が多すぎるので、この中の 1 つ星と 2 つ星のタイトルのみ抽出し、2,911 タイトルの標準図書リストを作成した。このリストの特徴は、ノンフィクションの選択が卓越し、また ALA Catalog, 1926-31 とちがって 1926 年以前の出版物も含まれている点にあるが、フィクションと児童図書が欠けているという難点もある。カーノフスキーらはあえて別にフィクションと児童図書のリストを作成して補足することはせず、このリスト一本で調査をやり了せた。チェックングの結果、1 つ星のタイトルは大部分の図書館に所蔵されているのに対して、2 つ

星まで含めると、所蔵率は、最高 86%、最低 1.5%、平均 25.6% と甚だしい差があらわれた。これにより、同カウンティの図書館では、蔵書数最高 11 万冊、最低 1,000 冊となってでている量的隔差が、そのまま質的隔差となっていることが判明した。また分布度を分析すると、文学、伝記、紀行類の分布度が高く、歴史がこれに次ぎ、応用科学、自然科学、芸術、言語学、宗教関係のタイトルの分布度は相当劣っている、すなわち主題によって分布度に相違のあることがあきらかになった。本調査では、1 つのリストによりながら、リストの主題分類を利用することによって、主題別の分布状態を検討するという新しい試みを企てたのである [4, 5, 6: 294-300]。

この年、同学部のウェイブルズ教授と、同大学の政治学準教授ラスウェル (Harold D. Lasswell) は、1935 年度のロックフェラー基金による海外研究の成果の一つとして、欧米諸国の大図書館の実態報告を発表した。この中の蔵書構成調査は同じくチェックリスト法によっている。調査対象は、英、米、仏、独、奥、伊、ベルギー、スイスの各国と、国際連盟の図書館、合計 33 館であり、いづれも学術図書館として屈指のものである。

カーノフスキーらの調査に比べると桁違いに規模が大きいが、チェックリストは精選し、少数主要文献のみに限定している。すなわち、英、仏、独、その他の国語で書かれた“現代の社会科学の著作” 476 タイトルと、逐次刊行物 97 種類からなる 2 種のリストを特別に作成した。これはさらに、経済、政治、法律、社会学に主題分類されている。いわゆる公共図書館のカテゴリーには含まれない大図書館の調査であるが、整理方法を、リスト別、主題別、都市別の所蔵率、タイトル別分布度の両面からとしている点で、従来の各調査と共通性をもっている [23: 19-53, Cf. 24: 94-5]。

1938 年 8 月 1-12 日にわたってシカゴ大学で開催された図書館研究集会で、カーノフスキーは、従来の調査を総括してチェックリスト調査法の手順を説明し、その 1 例として、シカゴ、デトロイト、ミネアポリス、ニューヨーク、ピッツバーグ、セントルイスの 6 市の公共図書館の本分館システムの蔵書構成を分析してみせた。この調査は、当時進行中であったシカゴ公共図書館総合調査のうちの蔵書構成の比較分析の 1 つとして実施されたものであり、のちにほぼ同じ内容で総合調査報告の中に再出された。

シカゴ首都圏調査の如き図書館群の調査はこれまで行なわれてきたが、図書館システムを比較する調査はこれ

が最初である。本分館を合計すると162館の多数にのぼるので、チェックリストは単純化し、Booklist, 1936のうちの最も基本的なタイトル350をピックアップした。内容はノンフィクション243、フィクション94、ミステリー小説12、軽いロマンス1となっている。

整理分析では、所蔵率はとりあえず、各タイトルのシステム内分布度分析を中心としている。分布度分析ではこの調査が最も整然としており、1つの基本的様式を示している。すなわち、各システム別に、分館の3/4以上、1/2~3/4、1/4~1/2、1/4以下1分館、本館のみ、0館、の所蔵しているタイトル数をあげる6級区分法をとっている。また分布度をシステム別により明確に比較するために、各級に得点を与え、タイトル数を乗じ、総得点を計算してシステム間の比較をするという、聊か便宜的ではあるが新しい方法をとった(後述)。所蔵率分析を省略していることなど、問題なきにしもあらずではあるが、特異かつ興味深い調査例ではある[8: 245-49, 10: 305-11]。

1934年のシカゴ首都圏調査の結果をみたシカゴ公共図書館長ローデン(Carl B. Roden)は、1935年の同館の年次報告の中で“シカゴ公共図書館に関する同様の調査を行なえば、明らかに実務上意義があるだろう”とのべ、シカゴ図書館学部の指導のもとに調査を実施する企画を提案した。この問題について図書館と学部は協議を行ない、カーネギー財団へ調査費の補助を要請した。財団は要請を受けて、1937年11月、学部に対して調査費1万ドルを支出し、図書館は、全館員がこの調査に協力する旨を約した。これらの協力をうけて、学部は調査主任にジョッケル(Carleton B. Joeckel)、副主任にカーノフスキーを命じ、1938年1月に調査活動を開始した。蔵書構成の調査分析はカーノフスキーが担当し、各種の量的分析法とともにチェックリスト法を採用した。

チェックリスト調査では、蔵書を、1. 基本蔵書(basic collection)、2. 新刊図書(recent publications)、3. 高価図書(expensive books)、4. 参考図書(reference books)、5. 児童図書(children's books)、6. 定期刊行物(periodicals)の各要素について分析評価するために、夫々別のリストを使用した。まず基本蔵書調査のためには、さきにウェストチェスター・カウンティで使ったウィルソンのStandard Catalogの星つきタイトル2,911のリストを用い、また新刊図書にはBooklist, 1936の成人図書1,428タイトル、高価図書にはBook Review Digest, 1922, 27, 32, 37年度版のうち、4ドル以上で、

書評における評価の高い2,140タイトル、参考図書にはショアズのBasic Reference Books, 1937のうち、重要度の薄いものを除いた254タイトル¹⁷⁾、児童図書にはALA, NEA, 全国英語教員会による合同委員会の編纂したBooks for Children, 1936の1,619タイトル¹⁸⁾、定期刊行物には、ワルターの小図書館用の126タイトルと、ライルのカレッジ用の370タイトルの2種¹⁹⁾を、それぞれチェックリストに充てた。

基本蔵書の調査対象は、本館と2つの地域図書館(Regional Library)を主体としたが、整理の結果、本館の所蔵率は91.1%、2つの地域図書館68.1%、63.4%で、本館に比べてかなり劣っていることが分った。新刊図書はこれに対して、前線サービス機関としての45分館の場合を中心に分析したが、上位と下位の所蔵率の差は著しく、サービス機能の隔差が看過できない程に大きいことを示している。また分布度調査では、分布度の域を狭めるにつれてタイトル数が増加し、0館所蔵は全タイトルの49%にも及んでいる。高価図書調査は本館のみに限定し、年度別にみると、1922年の62%所蔵が、1932年には21%まで減少し、恐慌による財政窮迫をはっきりと反映している。参考図書は本分館ともにきわめて高く、分布度も高いところから、本分館それぞれが基本的参考図書を備えつづけるべきだとする方針が実をあげていることが証明された。児童図書も、所蔵率・分布度ともに高く、蔵書の充実した状態をあきらかにしている。ワルターのリストによる定期刊行物調査によると、本館が92%、分館は最高66%、最低5%となり、本分館の差、分館間の差が大きい。一方ライルのリストは、すでにイノック・ブラットが使って調査しているので、その結果とシカゴの場合を比較し、全体としてシカゴの所蔵率の方がかなり低いことを指摘したが、同リストは全体を28の主類に分類しているので、両館比較を主類別に行なっているのは注目される。

分館について調べた新刊図書のチェックリストが、同じ方法でニューヨーク以下5市の調査に適用され、6市の本分館システムの分布度が比較されたことはすでにのべた。その他にこの調査で初めて実施された新しい方法がある。シカゴ市には、公共図書館の他にジョン・クレラー図書館、ニューベリー図書館の2大参考図書館があり、相互に主題分担しているが、この両館と、参考図書所蔵状態の比較調査を行なったのである。まずジョン・クレラー図書館の専門領域である社会科学関係の参考図書402タイトルのリストを作り、²⁰⁾ 両館蔵書をチェッ

クし、ついでニューベリー図書館の担当する人文科学の405タイトルでチェックした結果、²¹⁾ 両分野ともそれほど劣っていないことがわかり、シカゴ公共図書館のレファレンス能力は、ニューヨーク、ワシントン、ボストンに次いですぐれていると評価した。

カーノフスキーとしても初めての1館調査であっただけに、リストの選定、分析方法は入念を極めている。殊にジョングレラー、ニューベリー両図書館と2館比較調査を行なったこと、既述の6市の本分館システム調査を行なったこと、高価図書を年度別に整理して、歴史的考察を加えたこと、定期刊行物にはレベルを異にする2つのリストを用いたことなど、チェックリスト法に可能な様々な方法を採用している点は特に意義深く、のちの1館調査の範型を形づくったというべきであろう〔10: 298-329, Cf. 206-227〕。

この年シカゴ図書館学部を修了して研究助手兼講師となったマーティン (Lowell Martin) は、シカゴ公共図書館システム、及びシカゴ市周辺の7市の公共図書館の蔵書について、“社会的諸問題” 関係の所蔵状態を調査した。方法は大体カーノフスキーの範にならっているが、リスト作成には特に意を払い、Book Review Digest から、1934. 35, 36年に出版された公共図書館向きの標準のタイトル250を精選し、リストの信頼度テストまで行なった上で、チェックした。

整理の結果、シカゴ市システムの所蔵率の隔差が大きいこと、しかもシステム全体の所蔵率を他市と比べると、上位2館はシカゴシステムを凌いでいることがわかった。また、各館の蔵書規模の順位と所蔵タイトルの順位にある程度の相関関係のあることに着目して、成人図書1,000冊あたりの所蔵タイトル数を計算し、最高5.5タイトル、最低1.6タイトル(本館は除く)とかなり集約した数値を得た。そのほか蔵書規模の順位と所蔵率の順位の順位相関係数は0.904ときわめて高く、両者の間に密接な関係のあることが確認されるなど、興味深い分析を展開している〔25: 249-72〕。調査対象の範囲はカーノフスキーの場合に近いが、調査した主題が限定されているためにかかる詳細な分析が可能だったといえよう。こうしてチェックリスト法は、カーノフスキーの後継者に引きつがれて進展を遂げたのである。

1941年12月、カーノフスキーはACRLのジュニアカレッジ部会で、図書館の自己評価法の1つとしてチェックリスト法をとりあげ、カリキュラムと関係づけて分析する必要性を強調した〔11〕。

翌1942年には、ヴァージニア州の州立教育カレッジの図書館長メリット (LeRoy Charles Merritt) が、ユニオン・カタログに関する論考においてチェックリスト法を適用した。調査対象は学術図書館協会 (Association of Research Libraries) のメンバー館46、および12地域のユニオン・カタログとし、LCと88館のユニオン・カタログから得たサンプル3,682タイトルをチェックリストに使用した。もともと蔵書調査自体を目的とするものではなく、ユニオン・カタログ作成の基準を求めるための調査分析なので、蔵書分析評価法としては適当でない面もあるが、カーノフスキーの分布度調査と2館比較法を併合したような、重複所蔵率計算法、これを規準とする重複指数・包摂指数・特殊性指数の計算法など独自の分析法を提示している〔28: 58-96〕。蔵書構成論とユニオン・カタログ論の交点を示す興味深い研究である。

1949年に行なわれたロスアンゼルス公共図書館の総合調査の、蔵書構成の部は、カーノフスキーが担当した。調査全体の指揮には、同市の経営分析学者ターヒューン (George A. Terhune) と既述のマーティン (コロンビア大学図書館学部教授) があたっている。蔵書の分析評価では、カーノフスキーとマーティンが協力したとみるべきであろう。この調査はカーノフスキーにとって、2回目の1館調査なので、シカゴ公共図書館の場合以上に精密な準備、調査、分析をしている。

ここでもシカゴと同様まず、蔵書資料の形態別、本・分館別、本館の主題部門別冊数と、9年間の増加率を組み合わせた複雑な資料分類による各カテゴリーの数量を計算し、相互比較、増加率などを考察する量的分析を行なった上で、詳細なチェックリスト調査を実施した。使用したリストは、シカゴの場合と全くちがいが、徹底的に主題別リスト主義をとっている。要約すれば次のとおりある。²²⁾

本館

参考図書 A Mudge: Guide to Reference Books. 6 ed.

B Winchell: Supplement. (5,142)

数部門関係 A Lomax & Cowell: American Folk Song and Folk Lore. (380)

B Jensen & Wright: Best References of Geography. (131)

C Best New Zealand Books. (109)

芸術音楽 Lucas: Books on Art. (979)

- 歴 史 A Allison: Historical Literature. (541)
 B Cowan: Bibliography of California. (5,000)
- 文学語学 A Cambridge, English Literature. (759)
 B Cambridge, American Literature. (1,116)
- 科学工業 Hawkins: Scientific, Medical and Technical Books. (667)
- 分 館 Shores: Basic Reference Books, 1937. (450)
- University of Chicago Alumni List Booklist. (980)
 Special lists. その他

本館のリストが主題別主義をとっているのは、同館の主題別部門制を重視したためであるが、²³⁾ 部門間の陥没地帯の調査を行きとどかせるために、数部門に関係するリストを使用したことにまず注目する必要がある。また分館調査では“主題”別でなく“論題”(issues)別に15主類に分類して小リストをそろえている点は、本館の主題リスト主義の延長であるとともに、マーティンがさきにシカゴで行なった調査の“社会問題”関係へのアプローチを幾分反映しているとみなすことができる。²⁴⁾ 本分館ともに雑誌、児童図書などがチェックされていない点でもシカゴの場合と大きな相違がある。

使用したリストの組み合わせの複雑さ、タイトル数の大きさにくらべて、データ整理法は意外に単純で、本館の場合は各リストの所蔵率の比較によって、主題別のレベルの高低を判断し、分館では各論題別の分布度を分析比較している程度である。ただ本館の参考図書のデータを主題・タイプ別に整理比較して、工学、芸術、文学、政府刊行物などの所蔵率が高く、雑誌記事索引、地理学、書誌などが低いことに注意を促がしているが、これはリスト自体の分類によるものであり、ウェストチェスター・カウンティと同じ方式をとっている点に意を留めるべきものがある[12]。本調査の意義は、のちにリーも評価したごとく詳細なリスト編成と、リストの使いこなし方にあるといえよう。これをもって1館蔵書分析評価法が一応完成段階に到達したとするもあながち過言ではあるまい。

1940年、TVA計画の一環として、テネシー渓谷図書館会議(Tennessee Valley Library Council)が組織さ

れ、渓谷諸州の開発のために図書館も協力する態勢が整えられ、1946年、TVAの要請に従ってTVACが、同地域の公共図書館事情の調査を実施することになった。これが南東部諸州図書館共同調査(Southeastern States Cooperative Library Survey)である。主任にはミルクゼウスキー(Marion A. Milczewski)が就任し、彼の辞任後ノース・カロライナ大学のウィルソン(Louis Round Wilson)²⁵⁾がこれを受継いで1949年に調査の結果を発表した。調査対象は南東部9州の全公共図書館で、蔵書構成の網羅的調査の中では最大の規模である。²⁶⁾ チェックリストの回答を寄せたのはそのうち180館であるが、市町村、カウンティ、地域の各種公共図書館がこれに加わっている。

チェックリストには、1. 南東部地方関係資料、2. 地方・全国・世界関係資料の重要タイトルを、各種ビブリオグラフィーや専門家の意見を参考にして特別に編纂した。前者は南東部開発関係資料161タイトルから成り、資源保存、地域開発、代表的農作物、健康、教育の諸問題に及んでいる。後者はより一般的な見地から社会・経済・政治を扱っている182タイトルを含み、教育、軍事訓練、コミュニティ計画、労働組合、言論の自由、国際関係の各方面に及んでいる。この2種のリストの特質からも判明する如く、本調査は、南東部諸州開発への協力、および第2次大戦後のアメリカの国内的、国際的再建への寄与の上で、公共図書館が現在役割を果たしうる能力を診断することを目的としたものである。したがってこれまでの各種調査が、図書館蔵書全体の構造、特色、レベルを分析評価しようとしたのと比べると、大いに趣を異にしている。

第1リストは180館、第2リストは191館から回答が寄せられた。これらを、まず各州別に、また所蔵タイトル数の級別に図書館数を示す度数分布表にまとめ、ついで各州別に、最少所蔵館・最多所蔵館・中央値のタイトル数を示す表を作った。これらのデータから、ウィルソンらは、地域、全国的な重要な問題に関する資料が、公共図書館にはきわめて乏しいこと、とりわけ連邦政府、州、諸機関刊行物の所蔵状態が極度に劣悪であること、などの事実を指摘し、南東部住民がこの種の資料に接しうる機会を保障するために、公共図書館の収書方針に再検討が加えられるような示唆を与えた[33: 28-37]。チェックリスト法の技術的な面ではとりたてて言うべきものは見出せないが、このような広域調査においてウィルソンがチェックリスト法を採用したことは、同法がすで

に蔵書調査法の代表的方法の一つとしての地位を確保してきた事実を示すとともに、次のリー調査同様、同法がシカゴ図書館学部で温められ、練りあげられてきたものであることを暗に物語っている。

南東部調査とはほぼ同時期の、1947-50年には、ALAが社会科学研究会議 (Social Science Research Council) に要請し、“出版の自由委員会” 委員長、ワシントン大学社会学講師、シカゴ図書館学部訪問教授であったリー (Robert Devore Leigh) を主任とする、全国的規模の公共図書館調査 (Public Library Inquiry) が実施された。全体は19のプロジェクトから成り、多数の学者が参加して行なわれ、その結果はシリーズとして各担当者によりコロンビア大学出版部から出版されたが、リー自身も全般的報告書を出版し[34]、特に力を入れた蔵書調査についてはペンを改めて詳細にまとめた The Library Quarterly 誌上に発表した[35]。この蔵書調査では量的方法とチェックリスト法が併用されているが、後者はカーノフスキーの助言にしたがって実施し特に彼のロスアンゼルス調査からは多くのものを受け継いでいる[33: 260, 34:157, 160, et. al.]。

調査対象には、カウンティ図書館 10, 市町村図書館 50, 計 60 館を、全国各地から抽出した。これを奉仕人口、年間図書館費、蔵書総冊数の3つの基準により、4段階に区分し、問題によって、最も適切な区分を利用して分析している。蔵書構成の量的分析では、奉仕人口による区分を使ったが、チェックリスト調査では、カーノフスキーの初期論文[2, 3]の結論にしたがって図書館費による4段階区分をとった。したがって調査対象の内訳は次のようになる。

- Type I: 大都市図書館 図書館費 10-50万ドル (26)
- Type II: 小都市図書館 図書館費 2.5- 5万ドル (8)
- Type III: 町村図書館 図書館費 5,000-25,000ドル (16)
- Type IV: 小村図書館 図書館費 2,500- 5,000ドル (8)

チェックリストには、従来使われた多数タイトルのリストを避けて、簡単なリストを数多く組み合わせて使う方式をとった。すなわち、

1. 新刊フィクション 36
 - a. 1948 年度ベストセラー (12)
 - b. ALA 選定 “注目すべき” 図書 (12)
 - c. 専門書評家の評の一致する図書 (12)
2. 新刊ノンフィクション 89
 - a. ベストセラー (29), b. ALA 選定 (30),
 - c. 書評 (30)

3. 標準ノンフィクション²⁷⁾ 230
 - a. 米国史 (26), b. 政治 (60)
 - c. 労働 (49), d. 科学・社会 (10)
 - e. 食物育児 (25), f. 写真 (20)
 - g. 教育・家庭 (40)
4. 定期刊行物 120
 - a. 大衆雑誌 (25), b. 通俗雑誌 (25)
 - c. 良質雑誌 (20), d. 専門雑誌 (50)

このうち、3は、カーノフスキーのロスアンゼルスの分館調査に使われた15種の社会問題関係図書リストを基本とし、このうちの、ほぼ評価の定着したスタンダードなタイトルを抽出して作成した。またロスアンゼルスでは、チェックリストによる定期刊行物調査は省略したが、別の担当者が4類型分類によって量的分析を行なっているので、²⁸⁾ リーもほぼ似かよった4種類のチェックリストを用意したのである[35: 167]。このように、本調査ではリストの組み合わせに細心の意を払っている。

集計表には4つの大分類リスト別に、各級別の図書館類、小分類リスト別所蔵率 (級内平均) が示されている。これで見ると、当然のことながら、全リストとも、図書館費の減少するにつれて所蔵率が低下しているが、新刊フィクションの a, b 両リストは、全館種とも所蔵率が高く、c は Type III から激減している。新刊ノンフィクションでは、a の所蔵率が高く、b は Type III から激減し、c は図書館費 50 万ドル以上、5-50 万ドル、5 万ドル以下ではっきりと所蔵率の差が出ている。同様の分析によってリーは、所蔵率と図書館費の関係はきわめて緊密であるが、図書 (したがってリスト) の類型によって関係のあらわれ方が異なっていることを示しつつ、全体としては、図書館費 10 万ドル以上の館は各種図書類型において充実しているに反し、1 万ドル以下の館は、限られた予算を、大衆利用のために近刊ベストセラー、大衆雑誌の購入に投じて、標準図書類の所蔵率が極度に低く、これが両極をなしている、すなわち “図書館資料設備の2つの極を特徴づける二重性 (duality) は、公共図書館の構造、あるいは図書館の目的が修正を必要としてくることを示唆している” と結論している[35: 172]。論理的に組み合わせられたチェックリストを使用し、雑多な図書館を図書館費という基準で級分類し、蔵書構成の全体的構造を美事に整理分析した、興味深い調査例である。

一方カーノフスキーは、1952年にはグリーンズボロ (Greensboro, N. C.), 1954年にはマンズフィールド

(Mansfield, Ohio), 1957年にはヴァンクーヴァー (Vancouver, Wash.), 1960年にはセントポール (St. Paul, Minn.), 1965年にはラシーヌ (Racine, Wis.) と各地の公共図書館調査を次々と実施し [13, 15, 17, 19, 20], 蔵書構成調査ではチェックリスト法を使ったものと考えられるが, 詳しいことは分らない。また, チェックリスト法が公共図書館調査で広汎に使用されはじめ, あるいは同法に対する批判も出はじめたので, これらに対して一つの総括を示すべく, 1953年に“公共図書館蔵書評価”と題する論文を発表し, 各種調査から得た結論を簡潔にまとめ, 種々の疑問や批判に対して詳細な解答を示し, 改めてチェックリスト法の意義を強調したが [14; 16, 18 参照], これについては後述する。ハーシェが“蔵書評価法”においてチェックリスト法をとりあげ, ウィリアムズが“図書館蔵書評価法”でさらに詳論したのはこれ以後である。1940年にマックダイアミッドが, 公共図書館の蔵書調査法の重要な方法として紹介した当時は, 僅かにイリノイ州, カーノフスキー等 2~3 の調査例があるにすぎなかったが, その後の10年間で相当広汎に適用され, 漸く総括段階に入ったのである。

参考までにリー以後の調査例を1~2紹介すると, 1966年, ノーウォーク (Norwalk, Conn.) の4つの公共図書館を調査した, デイトン・モントゴメリ (Dayton and Montgomery, Ohio) カウンティ図書館長チェイト (William Chait) と, フィンケルシュタイン記念図書館 (Spring Valley, N. Y.) 館長エイク (Robert S. Ake) は, Library Journal 誌の推薦図書リストをもとにして, Business books, Technical Books, Reference Books の3種のリストを作成し, これをもって蔵書をチェックし, 分析評価した [40: 22-34]。また同年, イリノイ大学図書館学部長ダウンス (Robert B. Downs) は, 前年ノースカロライナ州で行なった全州図書館資料調査と同じ方式で, ミズリー州の全州資料調査を実施したが, ノースカロライナでは大学図書館の場合でのみ採用したチェックリスト法を, 公共図書館へもふえんして, 独自に編纂した Basic Periodicals (100 タイトル), Choice of Books for College Libraries から抽出して作った Basic Reference Collection (257 タイトル) の2リストを使って調査した [41: 101-105]。²⁹⁾ 両調査とも比較的常識的な調査であり, 特にここで詳しく紹介するほどのこともないが, チェックリスト法が全州資料調査, 市内公共図書館システム調査などに応用された例として, その意義は十分認められるべきである。

3.

一口にチェックリスト法と言っても, 調査手順, チェックリスト決定, 分析評価法はきわめて多様である。それは使用するチェックリストの種類による差でもあり, データ処理・分析評価法による相違でもあるが, 以上にみた各種調査例の中に, 現在考えうる方法が一通り出そろっていると考えられるので, これらを整理しながら, チェックリストによる公共図書館の蔵書分析評価法を総括しておきたい。

調査手順を, カノフスキーは, 1. 図書館の目的の決定, 2. 評価用具 (measuring instrument)=規準図書リストの選定・作成, 3. チェッキングの3段階に区分しているが [8: 245-46], 調査の準備開始から, 分析評価の完了までの手順としては十分でないので, 私はもう少し詳細に区分して, 次の6段階を設定した方がいいと思う。

1. 調査目的の決定
2. 調査対象の決定
3. 評価用具チェックリストの選定・作成
4. チェッキング
5. 集計
6. 分析評価

以下各段階別に詳論しよう。

1. 調査目的の決定

調査目的の決定と, 2の調査対象の決定は, 必ずしもすべての場合にこの順序で進行するとは限らない。たとえば, 公共図書館の蔵書構成の全体, あるいは特殊領域の性格を分析し, 評価するために本法を使用する場合は, 上に記した手順で作業がすすめられるが, 特定の図書館, 図書館群が予め決定され, その総合的調査の一環として本法による調査が実施されるときは2と1の順が逆になる。また, 特定の図書館, 図書館群の蔵書構成の分析評価のために本法が採用される際は, 1と2が同時に決定される。

このような関係を一応認めたいので, 調査の目的決定について考察すると, まず蔵書構成自体の構造・性格を分析評価する場合と, 図書館の他の諸機能, 諸設備, その他の諸条件との関係を考察する場合とに分けられる。前者では, 蔵書のもつ主題的あるいは水準的性格・特徴を追求し, チェックリストを基準として現在の蔵書のレベルを評価し, あるいは他館の蔵書と比較して優劣を判定し,

主題分担状況を考察したりすることを目的とする。カーノフスキーのシカゴ首都圏調査、イリノイ州調査などはこの例に数えられよう。後者では、図書館の対外活動・参考業務・閲覧方式（開架式、出納式、主題別部門制など）との関係、分類・目録との関係、利用状況、顕在的・潜在的な要求との関係、地域社会（人口、職業、産業など）との関係、図書館費・図書費との関係、職員構成との関係などを究めることを目的とする。

また、蔵書全体の主題別、水準別構造の性格を調査する場合と、蔵書のうちのある部分、たとえば参考図書、基本（一般）図書、社会問題関係図書、地方資料、児童図書、フィクション、定期刊行物などのいずれかを調査する場合とは目的が異なっている。シカゴ公共図書館、ロスアンゼルス公共図書館調査や、シカゴ首都圏、イリノイ州、Public Library Inquiry などは前者に属し、マーティン、ウィルソンらの調査は後者に属す。

蔵書を望ましい基準に照らし合わせて、現在の蔵書の基準達成度をテストする場合と、チェックリストを媒介としながら、特に評価的な意味においてではなく、蔵書の特質を追求しようとする場合が区別されねばならないことは先にふれた。前者はカーノフスキーが“*How good is my library?*”と設問している如く、蔵書のもつ価値の度合いを決定しようとする自己評価（self-evaluation）又は他者による評価であるが〔11〕、後者では、基準の達成度の判定を媒介としながら、究極的には図書館の蔵書の特質を追求し、現在果たしている役割をたしかめ、図書館の目的・方針を模索、再検討しようとする。多くの場合かかる調査は、蔵書をパターンナイズし、各パターンに夫々の意味特性を認めようとする方向にすむ。

Public Library Inquiry やシカゴ以下6市のシステム比較は、かなり評価的側面をもちあはするものの、各パターンの特質、役割をも認めんとする傾向ももっている。のちにチェックリスト選定作成の項で詳論することになるが、このような、チェックリスト法から評価的性格を除去して、図書館の多様性を認め、蔵書構成のパターンを設定し、各々の独自の意義役割を追求するチェックリスト調査も必要である。

チェックリスト法を最も常識的に考えると、標準図書リストで蔵書をチェックし、リスト中のタイトルの所蔵の有無を点検し、欠落タイトルを補充する目的で本法を使用することになる。この場合問題になるのは個別のタイトルであり、所蔵率や分布度の如く、量化一般化した

評価は附随的な意味しか持たない。すなわちリストは、購入リストと同じ役割をもち、リスト中のタイトルすべてを購入所蔵することを目指す。これに対して、所蔵率や分布度を計算することによって、蔵書全体の目標達成度をテストし、あるいは蔵書構成の構造を分析し、性格を判断する立場がある。この際チェックリストは、図書館が購入所蔵してしかるべき図書のサンプルにすぎず、その欠落を補充し、リストの完全所蔵をなしとげて目標を達成したことにはならない。リストは図書館、およびその蔵書のもつ目標の達成度をテストするための便宜の尺度にすぎず、究極的目的は蔵書全体を、目標に接近させることである。蔵書全体の充実によって結果的に所蔵率ないし分布度において、適切な状態にいたらしめることこそが調査の目的なのである。

チェックリスト法を適用する場合にも、このように色々な角度から目的が設定されうるが、最終的にはいずれも蔵書構成の質的現状を調べ、今後の図書選択・蔵書の構成の方針を求め、図書館のサービス機能を向上させることを目的とする。様々の具体的目的決定は、つまるところこの終局目的のための基礎的作業である。したがって、具体的目的は、必ずしも単独で設定されるとは限らず、むしろ一般的には、いくつかの目的が同時に複合的に設定されるべきである。

2. 調査対象の決定

既述の様に、目的決定との関係でみると、調査対象の決定法は三種類考えられる。すなわち、明確な目的が設定され、その目的に最も適当とみなされる図書館を選定する場合、特定図書館の蔵書構成を分析評価する場合、および特定図書館の現状の分析評価の一環として蔵書調査が行なわれる場合である。第1の場合は、調査目的を様々な角度から考察して、調査に必要な条件を十分に吟味し、その上でこれらの条件を満足する図書館を選定する。第2の場合では、調査の目的と対象が同時に決定され、調査目的決定の中に対象決定がすでに含まれている。第3の場合は、蔵書構成とは直接関わりない他の諸条件によって、あらかじめ調査対象が決定され、蔵書調査の目的がその後決定される。

調査対象館の数からみると、1館調査、2館調査、3館以上の多館調査の3種にわけられる。1館調査の場合は、チェックリストを基準として、目標達成度を評価するか、その図書館の他の諸条件との関係を分析するか、蔵書の内容を分類して、分類別所蔵率を比較するなどの

方法がとられるが、いずれにせよ対象がまとまった蔵書であるため、調査方法が却って複雑化する傾向がある。カーノフスキーの実施した、シカゴ・ロスアンゼルス両公共図書館調査の例で明らかのように、チェックリスト数が増加され、その組合わせによって多角的に分析する方法がとられている。

2館調査においては、1館調査とも多館調査ともちがった独自の分析方法がある。カーノフスキーがシカゴ公共図書館のレファレンス図書を評価するために、ジョン・クレラー、ニューベリー両館と、それぞれの主題分野について2館比較した方法、メリットが重複所蔵率を計算するためにとった2館比較法などがそれである。その意味で、2館調査と3館以上の多館調査とは区別されなければならない。その他に、1館調査法をそのまま2館に適用して、両館を比較する方法があることは言うまでもない。

3館以上の多館調査 (multi-library survey) [42:27] では、1館調査法の単純な拡大による比較分析法、2館比較法の拡大利用、および多館調査独自の調査分析方法の3種類が考えられる。第1の例は、チェイトの4館調査やダウンズのミズーリ州37館調査などであり、第2の例はメリットの重複指数、包摂指数、独自性指数の計算法である。多数館特有の方法には種々の変差がある。カーノフスキーはシカゴ首都圏調査で、所蔵率による図書館の序列配置、標準得点の計算、分布度分析などを行った。イリノイ州調査では、所蔵率の級区分と奉仕人口の級区分による度数分布表を作成して、全体の傾向を総覧できるようにした。またマーティンは、蔵書総冊数とリスト中のタイトルの所蔵率の関係を追求し、さらに地域社会の教育水準、経済的水準、人口動態などの関係を考察した。

Public Library Inquiry においてリーは、図書館費によって対象館を級分類し、図書館費と所蔵率の関係を分析した。

これらの調査例にみるように、多数館調査独自の方法は、奉仕人口、蔵書総冊数、図書館費その他の諸条件と所蔵率の関係を比較分析する形のものが多く、しかもこれらの諸要素は、館数が増加するにつれて数値で表示することが困難になるので、等間隔、不等間隔に級区分され、度数分布表にまとめられる。カーノフスキーやマーティンの如く、個別図書館について分析しているのは、むしろ特殊な例というべきかもしれない。

また等しく多館調査といっても、相互に特別の関係を

もたない多数の図書館を調査する場合 (Public Library Inquiry)、ある地域の図書館を対象とする場合 (イリノイ州、南東部諸州、ミズーリ州)、相互に密接な関係をもつ図書館システムを対象とする場合 (シカゴ地区、ノーウオーク市、シカゴ・ロスアンゼルス公共図書館の本分館システム)、および複数の図書館システムを対象とする場合 (シカゴ、ニューヨークなど6市調査) の如き、いくつかの型がみられる。またまとまった1つの図書館システムでも、それが独立対等な関係にある図書館群であるか、本館・分館システムを構成しているかによって、調査分析方法は使いわけられなければならない。

最後に、ある地域の図書館すべてを対象とする悉皆調査 (イリノイ州、東南部諸州、ミズーリ州)、あるいはある基準にあてはまる図書館を残らず調査する悉皆調査 (メリットの学術図書館協会所属図書館調査) と、母集団から一定数の標本を抽出して調査し、全体の傾向を推計するサンプル調査 (Public Library Inquiry) のいずれにするかも、この段階で決定さるべき重要な問題である。特にサンプル調査の場合は、調査目的を最大限に達成するように、サンプリングに十分な配慮が加えられるべきことは言をまたない。

3. チェックリストの作成・選定

この調査法を適用する場合、どのようなチェックリストを使用するかは、調査の成否を決定する最大の鍵である。カーノフスキーは、評価用具としてのチェックリストに要請される一般的条件として、妥当性 (validity)、信頼性 (reliability)、および実用性 (practicability) の3条件をあげている。妥当性とは、使用するリストが、当該公共図書館の蔵書構成を分析評価するという目的に対して、最も適当な用具であるかどうか、換言すれば、チェックした結果がどこまで調査目的を満足する答を出すかである。たとえば、大学図書館の蔵書チェックのためのリストとしてはきわめてすぐれていても、公共図書館の蔵書構成の評価用具としては適当でないこともありうる。すなわちそのリストは、調査目的に設定された問いに、満足すべき答を出してくれない。この場合このリストは妥当性を欠くという。

また、調査の結果が仮に当初設定した問いに答える形であらわれたとしても、そこで得られた蔵書構成の程度や性格が実際の蔵書構成を歪曲し、実態をあるがままに忠実に把握していない場合には、そのリストの信頼度が欠けているという。リスト所収のタイトル数が少なすぎ

ると、図書館によって、偶々そのタイトルを多く所蔵していたり、逆に少なく所蔵していたりすることがある。かかる偶然的条件が入り易いリストは評価用具として適格でない。どの図書館に適用しても蔵書の実態をそのままに圧縮して再現する、客観的規準としての信頼度が要求されるゆえんである。

信頼度を高めるためには、リスト所収のタイトル数を増加すればよい。しかしタイトル数が余り多すぎると、逆にそれだけチェック作業が困難になる。カーノフスキーが Standard Catalog の全タイトルを使用せず、そのうちの星つきタイトルだけに限定したのは、この困難をさけるためである。すなわち、調査者に与えられた時間的、あるいは人員、経費などに可能な範囲内に、タイトル数を限定しなければならない。これをチェックリストの実用性と呼ぶ〔6: 287-8〕。したがってリストの信頼性と実用性は相互に矛盾した方向を指していることになる。リスト作成・選定者は、この2条件の均衡する点でタイトル数を決定する訳である。

マーティンは、リスト作成段階で、信頼性の検定を行っている。すなわち、チェックリストの全タイトルを2等分し、それぞれのリストで同一図書館群を対象として調査し、両調査のデータを比較した。その結果、所蔵率による図書館の序列が一致したので、このリストに信頼性ありとみなした〔25: 255〕。信頼度係数計算法のうちの折半法を採用したわけであるが、マーティンの如く序列の一致をみて満足するにとどめず、所蔵数または所蔵率の相関係数から、信頼度係数を算出する厳密な検定法を適用することも可能である。

次に、チェックリスト法は、調査目的、調査対象に応じて、特に蔵書調査を目的とするリストを新しく作成する場合と、既存の各種図書リストのうち、目的、対象に最適と考えられるものを選定して使用する場合に分けられる。我々のみた範囲内だけでも、この両方法の例は相半ばしているが、既存リストを使用したのはカーノフスキーとイリノイ州だけで、その他の調査者はいずれも、既存リストを利用し、あるいは各種ビブリオグラフィーを参考にしながら、その調査のために独自のリストを作成している。この点についてハーシェは、“この方法を使用する評価者は、Standard Catalog, ALA Catalog のような、出来合いの、幅広い目的のリストよりも、むしろ特別に編纂されたリストを使用すべきである”と述べ〔36: 15〕、ウィリアムスは、多館調査においては特別のリストを作成する傾向があることを指摘している

〔42: 31〕。これらのことから、一般的には独自のリストを使用すべきだとする見解がほぼ定着しているといえよう。

しかし、一定の基準で選択された図書リストを作成する作業は決して容易なことではなく、リストの客観性を期するためには、グループ作業としなければならないので、それだけの条件の整わない場合には既存のリストを使用する以外にあるまい。また1館調査においては、たとえばカーノフスキーがシカゴ公共図書館の定期刊行物のチェックのために、ライルのリストを使用し、同リストを使って調査したイノック・ブラットの場合と比較しているように、既存のリストを使用することによって、同じリストを用いた他のデータと比較することが可能になるという利点もある。したがって、少数館、殊に1館調査においては、既存のリストを有機的に組み合わせて使用し、他館との比較をこころみる方がよく、逆に多館調査では、調査目的に最も適合するリストを作成して、比較分析を効果的ならしめるべきだとした方がより正当のように思われる。

リスト所収タイトル数は、リストの信頼性を決定する重要な問題であり、カーノフスキーの言うように、実用性の許す限度内で最多数のタイトルをおさめるべきであるが、実際に使われたリストをみるとかなりの幅がある。1館調査の2例をみると、シカゴ公共図書館は9,655タイトル、ロスアンゼルス公共図書館では、本館だけで14,924タイトル、分館を合わせると16,354タイトルの多きに及んでいる。多館調査では、シカゴ首都圏78館の4,794タイトル、イリノイ州281館の4,260タイトルが最上位にあり、Public Library Inquiry 58館は475タイトル、南東部諸州180館は315タイトルと桁違いに少なく、マーティンのシカゴ地区52館の250タイトルが最少となっている。したがって、1館調査ではタイトル数を多くして精密な分析を加え、多館調査では比較的少数の、精選された単純なリストを使用して、調査作業と分析を容易にしようとする傾向がはっきりと認められるが、多館調査の場合、館数とタイトル数の間に特別の関係を見出すことはできない。

リストの信頼性の下限をどのあたりまできげることができるかは、マーティンの折半検定法などによってきめられるべきであるが、そのマーティンのリストがタイトル数最少となっているので、リスト作成法如何では、少なくとも250タイトルまで引き上げることができるといえる。一方実用性の上限は、作業量と作業能力によって

決定される。すなわち、作業量が多くても、調査期間と、これにたずさわる人員およびその調査能力が、これを完遂するに足るものであれば、実用性の上限は相当高められることになる。作業の大部分はチェックングなので、今仮に、作業量＝チェックング回数とみなし、チェックング回数＝タイトル数×図書館数から、作業量＝タイトル数×図書館数とするならば、実用性とタイトル数・図書館数の関係の手掛りとしてすることができる。

これで見ると、タイトル数最多のロスアンゼルス公共図書館本館と、タイトル数最少のマーティンのシカゴ地区調査の作業量はほぼ同量だったことになる。したがって両調査の作業能力(調査期間、人員、能力を総合した)も同等のものでよかったわけであり、その他の調査は、作業量の多少と逆比例した総合的作業能力をもって実施されたといえる。ともかく、実用性の上限と信頼性の下限との間には、ある程度の幅があるので、この間の最も望ましいところでタイトル数を決定することになる。

また、蔵書全体を分析評価するか、限られたある分野の蔵書を分析評価するかによって、リストの種類も当然異なってくる。蔵書の総合調査の例をみると、シカゴ公共図書館では9種類、ロスアンゼルス公共図書館では本館で10種類、分館の各種小リストを合わせると、実に23種類も使っている。シカゴ首都圏では5種類、イリノイ州では6種類、Public Library Inquiry では大分して4種類(細分すると17種類)と、多館調査でもかなりの数のリストを使いわけているので、リスト数には別にはっきりした基準はないといわねばならない。1種類のリストを使っても、その内部分類を効果的に利用すれば、多種類のリストを使用したと同じ結果が得られるので、問題はリストの数にあるのではなく、使用するリストがどれだけ多くの角度から蔵書を分析し、立体的にとらえて評価しうる条件をそなえているかどうかにかかっているというべきである。

他方、蔵書のある部面のみにも光をあてて、これを分析評価しようとする場合には、当然リストの数は限定されてくる。社会・経済・政治・法律の諸分野に限定して調査したウェイブルズ、TVA 地域開発関係資料、戦後再建関係資料を集中的に調査したウィルソン、社会問題関係に焦点をしばったマーティンらの調査は、それぞれの主題分野において、厳選したタイトルのリストを使用しているし、ダウズの調査も定期刊行物と参考図書だけに限ったリストを用いた。カーノフスキーがジョン・クレラー図書館、ニューベリー図書館と、シカゴ公共図書

館を、社会科学、人文科学両分野の参考図書について調査比較した場合も、リストはかなり限定されていた。これらの場合には、当然タイトル数も少なく済む。総合的リストを使用するか、部分的リストを使用するかは調査目的によって決定されるところである。

総合的調査についていまだ少し考察を加えるならば、シカゴ首都圏のように、リストを基本図書、新刊図書、児童図書、参考図書、高価図書の各カテゴリーにわけける方法と、ロスアンゼルス調査のように、主題別のリストを使う方法とがある。いずれも図書館分類法と同じ手法で分類して、全蔵書を評価しようとしたものであるが、夫々の分類基準は全く異っている。どの分類基準を使うかは調査目的によって決定されるべきであり、その長短を論ずることはできない。要は調査目的を十分に達成するためには、リスト分類にも十分考慮を払うことである。

異質のリストを使いわけける方法をとらず、1つの総合的リストの分類を有効に生かして立体的分析を加えることが可能であることはすでにのべたが、この場合、リストの分類と図書館の分類とが必ずしも一致するものではないことに注目する必要がある。一見これは不便なようであるが、実はこの点にこそチェックリスト法独特の意義がある。図書館分類はもともと蔵書全体から1冊の図書を採り出す手段として作られたものであって、蔵書構成分析の基準として作られたものではない。そのため図書館分類にもとづいて作成される蔵書統計を使って蔵書構成を精密に分析しようとする、多くの困難に直面することは我々の常に経験するところである。この点、チェックリストを適切に編成し、あるいは単一リストの内部分類を有効に利用することによって、主題別、水準別、その他さまざまな角度からの蔵書の分析が可能となる。Public Library Inquiry の分類はこういう目的できこまかに、かつ合理的に構成されており、チェックリスト法の長所を完全に活用した例といえる。既成リストを利用するにせよ、新たに編纂するにせよ、また複数リストを用いるにせよ、単一リストの内部分類を利用するにせよ、蔵書の総合的調査に際してはとくにこの点を十分考慮しておくべきであろう。

4. チェックング

チェックリストを用いて蔵書をチェックする作業を細分すると、そこに3種類の方法が見出される。その1は、調査者自身が図書館へ赴いて、直接に目録カードと照合するフィールドワーク方式である。この方法によると、

図書館の書庫、職員の業務、諸設備などを実際に見、さらに職員とのインタビューによって図書館の現状を総合的に把握して、チェックリスト法だけでは理解できない部分を補うことができる。図書館自身が自己評価・診断のためにチェックリスト法を適用する場合は、完全なフィールドワークになるが、我々が本稿で見た調査の大部分は、調査者が館外者であり、外部から蔵書を分析評価する形になっているので、特にフィールドワーク方式を問題にする必要がある。

先にみたように、チェックリストの妥当性や信頼性自体の保証をうることすら容易でないので、観察法やインタビューなどによって不足な面を補い、さらにはリストの妥当性・信頼性を逆に検定することも考えなければならない。カーノフスキーは、シカゴ公共図書館調査は言わずもがな、ロスアンゼルス調査でも、膨大な種類とタイトル数のリストを使用しながら、なおかつ及ばざるところを観察法・インタビュー法によって補って説明分析している。

第2は、調査者自身は現場へ出向かず、チェックリスト、調査依頼書、及び付随的質問紙を調査対象館宛に郵送し、図書館職員の手でチェック作業が実施され、調査者の許へ回答紙とともに返送され、調査者が集計分析する郵送調査方式である。これは広域にわたり多数の図書館を調査する場合に適し、Public Library Inquiryで採用された。図書館員の誠意ある協力が期待できるところではこの方式が有効である。それは、単に調査者の手元に、詳細正確なデータが集められるだけでなく、とかく経験の評価ですませる傾向のある図書館員自身に、自館の蔵書を客観的基準で分析評価する機会を提供することにもなり、二重の成果が得られる訳である。

第3の方法は、カーノフスキーが、シカゴ市など6市の本・分館システムの調査でとった、ユニオンカタログ利用方式である。この方法では、観察法、インタビュー法、質問紙などの補助的調査は一切行わず、ユニオンカタログにあらわれた限りでの調査であり、カタログさえ十分に整備されていれば、作業は最も敏速に進捗する。短期間に、デスクワークで、多館調査を行なわねばならない場合には、最適の方法である。メリットが、ユニオンカタログ問題を論考するために、12のユニオンカタログを使ってチェックしたこともすでにみた。同じ方法を、個別図書館調査に適用して、各館の冊子目録によってチェックを行なうことも可能である。

以上の3種の方式はそれぞれ長所を持っているが、反

面に欠点もある。フィールドワークには十分な時間と調査要員が必要であり、多館調査の場合には相当の困難がある。郵送調査方式は、調査者の労力を図書館員が肩代りしてくれるので、それだけ負担は軽減されるが、協力態勢が欠けていたり、図書館員の時間的余裕がない場合には、回収率の低下、チェックの不十分さなどの難が生じてくる。見方によっては、チェック作業を実施する意志、あるいは余裕のない図書館の蔵書こそ、精密な分析評価を受ける必要があり、調査に協力する図書館はそれだけですでに日頃から蔵書構成に考慮を払っているので、あえて調査するまでのことはないともいえよう。

ユニオンカタログ利用方式は簡便ではあるが、他のデータによって不足を補うことができないので、分析評価が皮相的になる傾向は否めない。これらの点を考慮に入れた上で、調査目的、調査対象、使用するリストの性格に応じて、最適の方法でチェックすべきである。

5. 集 計

リストをチェックしただけでは調査は完了しない。これをさらに、調査目的にしたがって、適切に集計し、分析評価のためのデータを作成しなければならない。我々のみた調査例だけでも、集計法は単純なものから複雑なものまで、きわめて多様である。集計法如何によって調査の成否が決定されるともいえる程に重要な問題なので、各調査例の方法を整理しなおしてみることとする。

最も単純な集計法は、各館別に、1. リスト所収タイトル数、2. 図書館所蔵タイトル数(チェック数)、3. 非所蔵タイトル数、4. 所蔵率(1に対する2の百分率)を記入する方法である。これはすべての調査者が必らず行なっている最も基本的な集計法である。所蔵率をみるだけで各館の蔵書のレベル、性格などをある程度判断できるので、この集計を示すだけでおわっている調査例もある。ダウンズ、チェイトは、所蔵率の計算も行なっていないが、同一リストによる多館調査においては、これだけでも所蔵の序列をすることができるし、所蔵状態も一応わかる。カーノフスキーのシカゴ、ロスアンゼルス両公共図書館の1館調査では、多数のリストを用いて、各リストの所蔵率を計算するだけで評価を了えているが、リストの複雑多角化に応じて、集計方法は単純化する傾向があるともいえよう。

多館調査の場合に、各図書館の所蔵率の序列が問題になることに言及したが、集計表において図書館をどういう順序に配列するかはきわめて重要な問題である。調査

例に見た限りでは、1. 所蔵数（所蔵率）、2. 図書館費、3. 奉仕人口、の3基準によって図書館に序列を与えている。すなわち、カーノフスキーは、シカゴ首都圏調査やシカゴ公共図書館の分館調査で、所蔵率あるいは所蔵タイトル数の順に図書館名を列記し、マーティンも、シカゴ市45館、近接7市の図書館を別々に、所蔵タイトル数の順に配列して、他の分析への道を開いた。Public Library Inquiry では2の方法により、図書館費を基準にして配列した。カーノフスキーは、シカゴ首都圏調査のデータを再整理し、奉仕地域人口によって図書館を配列する第3の方法をとり、所蔵率が奉仕人口よりも図書館費により直接的な関係をもっているとの結論をひき出したが、これがのちに、リーをして Public Library Inquiry で第2の方法を選ばせることになった〔3〕。所蔵率による序列表は、各館の蔵書のレベルを他館と比較し、全体の中の位置づけを知るに役立ち、図書館費による序列表は、図書館費と蔵書構成の関係を求めるために、また奉仕人口による序列表は、人口と蔵書構成の関係を求めるために、それぞれ有効である。

多館調査の場合、すべての館を列記した集計表は、そのままでは全体の傾向を把握するのに余り適当でないので、上記基準によって図書館を級分類し、各級ごとに平均所蔵率を示す表が使われる。Public Library Inquiry の図書館費による配列は、最終的には図書館費 2,500-5,000,000 ドルを9段階に級分類して、各級別の図書館数と平均所蔵率を示す表にまとめられている。またカーノフスキーも、奉仕人口による序列を、シカゴ市、ゲイリー市、人口 5-10 万、25,000-50,000、…、5,000 以下の9級に分類して、各級内でさらに人口順に配列し、分析する方法をとっている。所蔵数・所蔵率を級分類した場合は、級内平均所蔵率を示す必要がないので、各級に該当する図書館数をあげる度数分布表が作られる。ウィルソンの南東部調査では4級に区分した度数分布表を作成している。

これらの諸基準を組み合わせた集計表も作られている。イリノイ調査は、一方に奉仕人口の級、他方に所蔵率の級を示し、両級の交わる欄に該当する図書館数を記入した集計表にまとめた。これは奉仕人口による各級の平均所蔵率を算出する代りに、所蔵率をさらに級区分したものであり、全体の状況をより具体的、立体的に知るために頗る効果的である。チェックリスト法における度数分布表の最も精巧な例といえよう。同様に、図書館費と所蔵率をそれぞれ級区分した度数分布表を作ること

できる。また、奉仕人口と図書館費をそれぞれ級区分し、交叉欄の平均所蔵率を示す方法も可能である。

級区分法によらず、所蔵タイトル数・所蔵率の、最高、最低、平均値の3点を示して、手軽に全体の傾向をあらわす方法もある。カーノフスキーは、シカゴ首都圏調査でこの手法を用い、シカゴ・ロスアンゼルス両公共図書館の分館調査でも同法で説明した。またウィルソンは、各州別に、最高、最低、中央値を示す表を作っている。平均値と中央値のちがいをどの程度に考えるかはのちにみるとして、この方法は代表値を中心とする所蔵率のレンジを手早く知る上で便利である。

所蔵数（所蔵率）と関係のある条件としては、奉仕人口、図書館費のほかに、蔵書総冊数、地域社会の人口構成などが考慮されねばならない。マーティンは所蔵数順に配列した集計表に、成人図書総冊数（彼の調査対象は成人図書に限られた）、成人図書 1,000 冊に対する所蔵タイトル数を記入する欄を附加して、蔵書総冊数と所蔵タイトル数の関係を知る基本データとした。蔵書総冊数との関係をみる表としては、むしろ奉仕人口、図書館費の例にならって、蔵書総冊数による序列を使用する方がいいが、彼の場合は序列にさほど重きをおかず、両者の関係に焦点を絞っているので、これでも十分な成果が得られた。しかしより一般化するためには、蔵書総冊数順に配列し、所蔵数、蔵書 1,000 冊比所蔵タイトル数（あるいは百分率）を記入する集計表、あるいは蔵書総冊数を級区分して、各級の平均所蔵タイトル数（平均所蔵率）を示す表、さらには蔵書総冊数の級と所蔵率の級による度数分布表などに修正すべきであろう。

マーティンはまた、地域社会の奉仕人口を分類して、これと所蔵タイトル数の関係を求めた。その1は、住民の受けた学校教育の年限を基準とするもので、彼は、一定年限以上の学校教育を受けた人口の比率と、所蔵タイトル数をヒストグラムで示し、両者が極めて密接な関係をもつことを明らかにした。また住民の経済生活水準との関係をみるために、ある基準以上の地代を納入している住民の比率と所蔵数を同じ方法で図示し、両者の強い相関関係を確認した。これはしいてヒストグラムでなければならぬ訳ではなく、単に数値を比較する表でも目的は果たせる。あるいは両基準に該当する人口比を級区分して、各級別平均所蔵タイトル数（平均所蔵率）を記す表、あるいは所蔵率も級区分して、該当館数を示す度数分布表にすることも考えられる。

以上の各集計法は、チェックリストを一つの全体とみ

なして総チェック数を計算していく方法であるが、リスト自体に操作を加える集計法もある。すなわちすでにリスト選定・作成法の項でみたように、リスト自体の内部に何らかの分類が施されているか、あるいは分類する可能性がある場合に、分類別にタイトル数、チェック数、所蔵率を算出する方法である。カーノフスキーはシカゴ首都圏調査で、ALA Catalog 1926-31, 所収タイトルを出版年によって分類し、各年度別に所蔵率を示す表を作り、1926年という経済恐慌の年をはさむ時期の所蔵率の変動、したがって図書購入の質的量的変動の状態を分析した。またシカゴ公共図書館本館の定期刊行物調査では、使用したライルの分類リストによって、各主題別に所蔵タイトル数を計算し、同表を使ったイノック・プラットの結果と比較している。またロスアンゼルス分館調査で使った12論題のリストもこれに準ずるものであり、本来ならばのちにリーがPublic Library Inquiryで行なったように、一つの表に集計して主題間で所蔵率を比較すべきだった。ウェイブルズ＝ラスウェル調査は、全体を4主類に区分して、主題別に所蔵率を示す表を作っている。リストの主題分類を利用する方法は、すでにランダル大学図書館調査に前例があり、カーノフスキーも、大学図書館がこの方法によって主題別分析を加え、カリキュラムとの関係を検討する必要性を強調しているが[11: 306]、公共図書館でもかなり実行されているのである。

これまでみた集計法は、リスト所収タイトル数、各館の所蔵タイトル数、所蔵率を基本とし、これを様々な形に変形展開し、さらに他の諸条件との関係を追求する方法であるが、これとは別に、本稿で仮に分布度と呼んだ側面を分析するための集計法がある。つまりリスト所収の各タイトルが、調査対象館への程度に分布(distribution)しているか、すなわち何館によって所蔵されているかを計算する方法である。この方法はカーノフスキーによってはじめて使用され、ウェイブルズ＝ラスウェル、ウィルソンなどシカゴ図書館学部関係者が採用し、メリットもユニオンカタログの原理に従って同じ方法によっている。

メリットが使ったことからわかるように、これは基本的にはユニオンカタログで使われる手法である。すなわち、チェックリストの全タイトルについて、所蔵館名を示す表を作り、これを様々に変形していく訳である。第1に、所蔵館名が所蔵館数に書き改められる。カーノフスキーはシカゴ首都圏の参考図書調査で、New Inter-

national は65館、Britannica は60館、Who's Who in America は73館など、所蔵館数の特に多いタイトルを列記し、ロスアンゼルス分館調査ではさらに、重要と思われるにもかかわらず分布度の低いタイトルを逐一書き並べた。

所蔵館数を示すだけで分布度はわかるが、調査対象館数が多いときは、全館数に対する所蔵館数の百分率で示した方が、分布度を示す数値としてはより適当であり、明快である。カーノフスキーはシカゴ首都圏の場合、所蔵館数と並んで百分率をあげている[2: 281-3]。

これらは図書館を数量化して表示する方法であるが、同様にタイトルも数量化することができる。カーノフスキーはシカゴ公共図書館分館調査で、所蔵館数を基準にして、0館所蔵、1館所蔵、…10館所蔵、11館以上所蔵と序列を示し、各級に該当するタイトル数をあげている[10: 304]。こうしてタイトル、図書館ともに数量化され、すっきりとした表に整理される。ウェイブルズ＝ラスウェルは、0館から7館まで、級区間1とし、各級別のタイトル数と、全タイトルに対する百分率をあげた[23: 29]。つまりカーノフスキーの表は所蔵館の級別にタイトル数を示す度数分布表であり、ウェイブルズ＝ラスウェルの表は相対度数分布表である。

このままの方法では、多館調査の場合は殆んど全館数に近い級を設定しなければならないので、カーノフスキーのように11館以上を一括して1級とするか、もしくは所蔵館の級区分の区間を拡げて、10館間隔、20館間隔などとすることによって、級の数を減少し、全体を一覧できるまでに圧縮する必要がある。イリノイ調査では、100館以上に分布するタイトル数、あるいは“most popular”という漠然たるカテゴリーに属するタイトル数を示すにとどまっているが、級区間を拡大し、全体を圧縮することによって、かかる曖昧さを克服することができる。

カーノフスキーは、級区間をなまの図書館数によって決定せず、4分法によって、全図書館数の $\frac{3}{4}$ 以上、 $\frac{1}{2}-\frac{3}{4}$ 、 $\frac{1}{4}-\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$ 以下の4段階に区分する方法を一貫してとっている。最も典型的な例は、シカゴ市など6システム調査である。これは本分館システムの分布度を比較するための集計表なので、全分館の $\frac{3}{4}$ 以上、 $\frac{1}{2}-\frac{3}{4}$ 、 $\frac{1}{4}-\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$ 以下、本館のみ、0館、の6段階の級を設定した[8: 246, 10: 306]。その他の調査では、6市調査のように表にまとめて示さず、 $\frac{3}{4}$ 以上、 $\frac{1}{2}$ 以上、 $\frac{1}{4}$ 以下、など、要所々々で必要な級をとりあげて文章で説

明しているだけであるが、彼自身はむしろ手元に上の様式の集計表を持っていたのである。

最後に、所蔵率分析と分布度分析の性格を併せもちながら、独自の意義を持つ2館比較法をまとめておこう。カーノフスキーが、シカゴ公共図書館とジョン・クレラー、ニューベリー両図書館の参考図書の所蔵状態を比較した際、2館比較法によったことはすでにのべたが、その集計表には、AB両館所蔵、A館のみ所蔵、B館のみ所蔵、AB両館非所蔵、の4欄があり、各々のタイトル数と全タイトルに対する百分率を記入する度数分布・相対度数分布表の形式になっている。この表を各館別々の立場で読むと、所蔵数、所蔵率がわかり、両館共通の立場からみると、重複所蔵率、すなわち分布度がわかる。この意味で、2館比較法は所蔵率分析と分布度分析の中間的方法だとみなされる訳である。

同じく2館比較法でも、メリットの方法は少し違っている。彼はAB各館別に、自館所蔵タイトル数、比較対象館との重複タイトル数、所蔵数に対する重複数の百分率を記入する方式をとった。この場合チェックリストのタイトル数は記入されず、したがって所蔵率は分らない。また重複率は、カーノフスキーの場合はリストの総タイトル数に対する百分率なので、両館共通の数値となるが、メリットの表では、各館の所蔵数に対する百分率なので、両館の重複率の数値が異なってくる。その他に、カーノフスキーは重複率の高さをもって、両館が同等のサービスを提供しうる条件とみなして重視する傾向があるのに対して、メリットには非重複所蔵、すなわち各館独自に所蔵しているタイトル、分野を重視する傾向がみられるという相違があるが、これはむしろ評価法の相違である。

メリットはこの2館比較法を多館調査に一般化して、 n 館調査ならば nC_2 回の2館比較を行ない、両館の重複率を計算して、一覧表に記入する方式をとった。つまり左欄と上欄に調査館名を列記し(蔵書総冊数順)、左欄の各館を基準にして、比較対象館との交叉欄にその館との重複率を記入する。同館相互の交叉欄を除くすべての欄が埋められると、左欄の最下段に“包摂指数”(Index of Inclusiveness)、上欄の右端に“重複指数”(Index of Duplicateness)の欄を設け、タテ・ヨコの平均値をここに記入する。A館についてみれば、左欄のA館の段を右にみた時の右端の数値が重複指数であり、上欄のA館の段を下へくだった最下段の数値が包摂指数である。この重複指数は、A館が他館と重複している度合いの平均値

であり、包摂指数は、他館の所蔵タイトルの中で自館が重複して所蔵している度合いの平均値を意味する。前者はA館の蔵書が他館によって包摂されている度合いを示し、後者はA館が他館の蔵書を包摂している度合いを示すので、包摂指数－重複指数＝独自性指数(Index of Distinctiveness)として、他館と比較した場合のA館の蔵書の平均的な強さ、あるいは独自性を数値であらわす。独自性指数がプラスの場合は、A館の独自性は平均より上にあり、マイナスの場合は平均以下、0に近ければ平均的とみなす。メリットはこの計算をするために、別に各館別に3指数を記入する表を作成した〔28: 74-76, 93〕。

6. 分析・評価

以上の各種集計表をもとにして、最後に1館、2館、多館の蔵書の分析評価がおこなわれる。

まず、チェックリストを、カーノフスキーが“価値理論”と概念化したところの、価値の具体化されたものとみなすならば、調査館の多少には関係なく、およそ所蔵率であらわされるものすべてを、図書館蔵書の価値量を示す数値と解する素朴かつ一般的な評価法がある。すなわち所蔵率60%であれば、その蔵書は完全に満足すべき状態の60%を実現していると評価される。

しかし現実には、あらゆる意味で100%のリストはありえない。リストの目的と図書館の目的が異なれば、そのリストがその図書館にとっては150%、200%であったり、逆に70%でしかなかったりすることもある。目的が一致しても、リスト編纂者の判断や方針によって、微妙な差が生じてくる。したがって、2種以上のリストを使用する場合は、基準の異なる尺度を用いて計量する際と同様、基準を統一し、同じ尺度に換算して比較する必要がある。カーノフスキーが、編纂基準のちがう5種のリストによる調査の結果を、標準得点に換算したのもそのためである。換算した結果、“例I”の図書館では、所蔵率50%で同館の他のリストと比べて最低であった精選ノンフィクションが、標準得点では最高となり、平均値を基準とする標準得点と、数字の上の所蔵率の間に大きな相違のあることが明らかになった〔2: 285〕。標準得点法は、同一リストが多数の図書館で使われる場合にのみ計算できるものであり、しかも計算が面倒なために、カーノフスキー自身もこの調査以外には使っていないが、複数のリストを用いて多館調査を行なう際は、一応考慮に入れるべきであろう。

チェックリストにはこのような限界があるが、一応評価基準としての意義を認めて、リストの価値を100%と仮定する1館1リスト調査、1館多リスト調査の分析評価法を考察しておく必要はある。我々のみたものの中には前者の例がないので、後者の事例としてシカゴ・ロスアンゼルス公共図書館本館調査の場合をとりあげると、シカゴでは Standard Catalog, 参考図書リストなどは完璧に近い所蔵状態にあり、定期刊行物は、ワルターのリストでは100%, ライルのリストでは62%とかなりの差があり、高価図書は1922年の59%から32年の21%へと激減しているなどの事実が明らかにされ、またロスアンゼルスでは、アメリカ民謡・民俗、科学・工学、英文学などの諸主題が70%台と高く、ニュージーランド関係図書19.6%, 芸術37.3%などが劣弱であると診断された。

これに対して、1リスト多館調査、多リスト多館調査では、リストを100%の価値体とみなす立場をとらず、むしろ他館との相互比較によって、各館の蔵書の優劣の順位、さらには優劣の度合いを測る手段としてチェックリストを使用する傾向がみられる。つまりリストは、1館の蔵書を評価する基準としての尺度ではなく、図書館間の比較をするための媒体基準である。まず、所蔵数、所蔵率によって序列を与えれば、各館の優劣関係、全図書館群の中で各館のしめる位置がきまってくる。これを単純化して、最高・最低・代表値の3点で説明すれば、図書館群の所蔵状態の略図が示されることは先にみた。

所蔵率を級区分した度数分布表では、各級に該当する図書館数から、図書館群の蔵書構成の特徴を構造的に描きあげる。ウィルソンの調査では、リスト161のうち、50タイトル以上の館は4%, 10-49タイトル所蔵館は37%, 9タイトル以下が約6割をしめて、弱小図書館が圧倒的に多いピラミッド構造をなしている事実が確認された。カーノフスキーも平均値に近い図書館の序列が、全館の中央よりかなり上位にあること（すなわち平均値>中央値）から、“半数以上の図書館は平均以下である”と述べて、全体がピラミッド構造をなすであろうことを推測したが〔2: 286〕、度数分布表によればはるかに明瞭に構造が示される。イリノイ州調査では、25%以下の図書館が272館中227館（83%）にも及んで、余りに下層が厚いことが明らかになったため、25%以下をさらに15%以下、10%以下、5%以下の各級に細分し、この部分を累積度数分布表の形であらわした。

蔵書構成と関係をもつ他の諸条件との関係を示す相関

表からは、さらに興味深い結論が引き出されている。奉仕人口と所蔵率の相関表を示したイリノイ州調査によると、上記25%以下の図書館のうち、90%は人口1万以下、72%は5,000以下、55%は3,000以下となり、また所蔵率10%以下の134館のうち77%は人口3,000以下の図書館となり、きわめて緊密な関係にあることが一目瞭然となっている〔22: 54〕。カーノフスキーも奉仕人口と所蔵率の比較分析をして、図書館費と所蔵率の関係ほどに緊密ではないと結論したが、イリノイの場合でみると、それはそれでかなりの相関性をもっているとしなければならない。

Public Library Inquiry では、図書館費と所蔵率の関係を検討して、図書館費10万ドル以上の図書館と、1万ドル以下の図書館では、蔵書構成が完全に異質であることを指摘した。すなわち前者はあらゆる面で充実した蔵書構成をもつ、殆んど理想的ともいえるべき図書館であるに対し、後者は、量的にも質的にもきわめて劣悪な状態にあり、ポピュラーな図書の収集に主力を注いで、ともかくも当面の要求を満たそうとしているがために、改善の見込みすらも立たないこと、場合によってはかなり場当り的な図書選択が行なわれ、蔵書改善の努力が払われていないこと、両極の中間に位する図書館がほぼ平均的レベルにあるが、これは良くも悪くも両極の特徴を混有していること、などが詳細に説きあかされ、今後の課題は何よりも、蔵書構成のかかる二重構造的な改善、克服にあると強調された〔34: 171-2〕。

マーティンによる蔵書総冊数と所蔵タイトル数の関係の分析の結果、相関係数が0.904ときわめて高いことが証明された。また彼は、蔵書1,000冊に対する所蔵タイトル数を計算して、全館が1.6-5.5の間に分散していて、その関係が集中的であることを指摘し、原則として蔵書規模が大きければそのリストによる評点も上昇し、リストによる評点を高めるためには蔵書規模を拡大すること、そのために図書費を増額することが必要だと結論した。

しかし、1,000冊につき所蔵タイトルが1.6から5.5までの幅をもっている点に着眼し、彼は次の如き計算もしている。仮に250タイトルのうち50タイトル所蔵を最低基準とすれば、前者の比率でいうと蔵書は少なくとも21,000冊でなければならないが、後者の比率では9,100冊の蔵書で基準を充たしうることになる。この差はつまり、蔵書全体の規模の拡大によって基準のレベルに達する方法と、図書選択収集の方針を限定して、集約

的にこの型のタイトルを購入する方法があることを意味する。

また上位 10 館と下位 10 館の、1,000 冊につき所蔵タイトル数を比較すると、3.1:2.3 となる。これは、蔵書規模の大きい図書館ほどリスト所収タイトルの種類の図書の購入に力を入れ、小規模図書館ほどこの面で選択がずさんである事実を物語っている。こうしてマーティンは、蔵書総冊数とタイトル数の関係の分析により、各種の図書館の、図書選択方針と蔵書構成の関係をつきとめ、大きく言って選択方針に 2 つの立場を見出したのである。

リストの主題別使いわけ、あるいは主題分類のあるリストの使用には、カーノフスキーが標準得点に換算したような方法で、尺度を統一する必要があるが、一応尺度が同等だとみなされるリストによるチェックの結果を主題別に比較する場合は、各主題の所蔵率を計算し、また所蔵タイトルの主題別配分比率を算出して、量的蔵書分析法に類する構成分析をおこなうことが可能である。ロスアンゼルスの本館調査のリストは必ずしも同等の尺度で作成されたとはみなしがたいが、分館調査で使われた 15 論題のリストの基準はほぼ同等とされている。調査の結果は主題別の所蔵率の相違の著しさを示しているので [12:39]、これを主題別配分比率に計算することは可能でありまた必要である。Public Library Inquiry の 7 主題の間にも所蔵率の相違が歴然とあらわれている。しかしロスアンゼルスの場合はむしろ、リーも、米国史の所蔵率が各級とも最上位を占めていること、社会問題の所蔵率は概して低いこと、実用書がほぼ中間に位することなどを指摘するにとどめている。

主題間の所蔵率の差は、主題別部門制をしる館では、おそらく部門間の図書費の配分法に原因すると考えられるが、その他の図書館では、選択者の基準が主題によって異なっているためとみなさざるをえない。それは 1 つには、選択者とリスト作成者の間で、主題別に比重の置き方がちがうためであるが、購入図書の主題別冊数比率がリストの比率とほぼ一致する場合でも、リストの基準と一致する主題、リストよりも高いレベルの図書の多い主題、逆にリストより低いレベルの主題などの差が生じ、これがリスト所収タイトルの購入比率とリスト総タイトルの配分比率の差を生む場合もある。このような問題をあきらかにするために、蔵書、リスト、所蔵タイトルの各々の配分比率を計算する必要がある。Standard Catalog, ALA Catalog など全体として統一性をもっ

ているので、上記の比較をするための貴重なツールであろう。しかし実際には、カーノフスキーが大学図書館の場合で、カリキュラムとの関係で主題別所蔵タイトル配分比率の分析を要求している程度で、公共図書館の場合はその実例がない。

図書の類型別のリストを用いて所蔵率を比較する方法はカーノフスキーが屢々とった。この場合は、リスト作成の尺度が全く異なっているので、彼は標準得点に換算して比較した。しかしまた、各リストの完全さを一応認めて、各リストの所蔵率を直接に比較することも全く無意味ではない。すなわち、“公共図書館”は概して A リストの所蔵率が高く、B リストの所蔵率が低い、という結果が出たならば、そこに、公共図書館は A リスト型の蔵書を中心にしてサービスを提供することを主任務とする、という一般的結論が見出されるであろう。こうして様々のリストを用いてチェックしてみることによって、公共図書館が現実果たす能力を有している役割分野を確認すれば、今後の図書選択方針決定に資するところは少なくない筈である。

カーノフスキーが“高価図書”をチェックした結果を年度別に整理集計したことは先にみたが、この方法によって、一定期間の図書購入の動向をすることができる。彼は 1929 年という年を中心として、所蔵率が激減・緩慢な復旧という過程をたどったことを示した。この程度のことは、購入図書冊数の量的変動の過程をみればわかるが、蔵書冊数の増減の動向と所蔵率の動向の関係まで分析を及ぼせば、また新たな事実も発見できよう。

図書の類型別リストによる分析を一步すすめると、図書の水準別のリストによる蔵書水準構成の分析法が出ることは、先にリスト選定の項でものべた。その 1 例として、リーが定期刊行物を 4 段階に分類したこともみたが、この分析の結果によると、大図書館では良質雑誌、専門雑誌の所蔵率が高く、大衆購読雑誌、通俗雑誌がこれに次いでいるが、図書館費 25,000 ドル以下の町村図書館では大衆購読雑誌が第 1 位となり、1 万ドル以下の小図書館では通俗雑誌が第 2 位に躍上し、これにはるかに劣って良質・専門雑誌が 3・4 位にとどまって、大図書館と全く逆の構造を呈している。雑誌におけるこの方法を図書に適用して、幾つかの異なったレベルのリストを使用して蔵書の水準構成を分析することも可能かつ必要である。この水準別蔵書構成と、主題別蔵書構成の基準をくみ合わせれば、先に問題にした主題間の選択水準の不均等の内容を解明することができる。本館・分館・巡回

文庫の別にこの水準別分析を行なえば、種々興味深い問題が発見されるであろう。また、リスト所収タイトルの利用頻度を調べると、どのリストの利用度が最も高いかが分るし、所蔵率と利用度の関係についても何らかのことを物語ってくれるはずである。

分布度分析は、以上の諸方法とは異なり、個々の図書館の蔵書構成の分析や評価ではなく、個々のタイトルについてみれば、各タイトルの評価であり、図書館群、システムについてみれば、システム全体の蔵書の分析評価である。

基本データである各タイトルの所蔵館数を記入した集計表から、カーノフスキーは、概してポピュラーなタイトルの分布度が高く、これに圧されて重要なタイトルの分布度が低下していること、児童図書で分布度の高いのは大抵ニューベリー賞受賞作品であること、基本的参考図書は一般に分布度が高いが、必要性に地域差のあるタイトルは分布度が限られていること、などの傾向を指摘した。一応所蔵館数の順にタイトルを再配列して、分布度の特に高いもの、特に低いものを検討し、そこに何らかの共通性を見出そうとする方法である。またロスアンゼルス調査では、一般には評価の高いタイトルが、分館の分布度では意外に低い場合もある事実注目し、そのタイトルを逐一列記している。これらの手順を経て、図書館システムの図書選択方針に、共通した原則を見出すことができる。

所蔵館数を級分類して、該当タイトル数を記入した度数分布表を作ると、各タイトルは完全に量化され、個々の性格は表面から消えてしまうが、もともとリスト全体がある共通した属性をもつ図書のみを収録しているはずなので、特別の場合の他はタイトル名は捨象されてもさしつかえない。

最も整理された形の6市比較度数分布表では、各システムの分布構造の特徴が明瞭にあらわれている。シカゴ市では $\frac{1}{4}$ 以下分布のタイトル数が最多、 $\frac{3}{4}$ 以上分布がこれに次ぎ、分布度の両極分化傾向がみられる。カーノフスキーは特にこれについて言及していないが、シカゴ市では最も定評あるタイトルは全システムが共通して所蔵し、逆に意見の一致のみられないものは多くの館が購入から除外する傾向があるといえよう。ニューヨーク、ピッツバーグ、デトロイト各市もほぼ同様の両極分化傾向をもっている。これに対し、ミネアポリス、セントルイスでは、 $\frac{1}{4}$ 以下が最多の点は前記諸館と一致するが、第2位以下は、分布度の級が上昇するにつれてタ

イトル数が減少するという、むしろ常識的な傾向をあらわしている。

また、システム全体の非所蔵タイトル数はシカゴが62で最高、ニューヨークが9で最低となっている。分館数は夫々、45、46と全く互角なので、この相違は、ニューヨークが基本的タイトルをシステム内で少なくとも1部は所蔵する方針をとっているに対して、シカゴでは、各分館のサービス能力を同等に保つために、最も基本的なタイトルは全分館で購入し、そのためにはシステムとしての非所蔵タイトル数が増加してもやむをえないとの収集方針をたてているためと考えられる。またシステム全体の所蔵タイトル数が殆んど等しいニューヨークとミネアポリスを比較すると、前者の本館単独所蔵タイトルは9、後者は118と著るしく違っている。これは前者が多数の分館を利用して、全分館が購入責任を分担する方針をとり（ $\frac{1}{4}$ 以下分布は122タイトル）、後者が分館の所蔵を限定して、欠落タイトルは本館が購入する本館中心体制をしいているという方針の相違によるといえよう。

カーノフスキーが分布度調査をしたのは、すべての図書館は、相互貸借制をとっていても、やはり基本的図書は同等に所蔵して、地域での利用の便をはかるべきだとの見解をもっていたためである。したがって同じタイトルがシステム内に重複所蔵されている度合いが高いほど、サービス能力がすぐれているとみなし、 $\frac{3}{4}$ 以上、 $\frac{1}{2}-\frac{3}{4}$ …の各級に5、4…の点を与え、該当タイトル数を乗じ、これを集計して分布度指数を計算するという便宜的方法も利用した。これによると、システムとしての所蔵率では最低のシカゴ市が、分布度指数では第3位に上り、所蔵率では第2位のミネアポリスが分布度指数最低となり、システムとしての特徴がある程度描きだされている。

しかし、同一タイトルの重複所蔵を避け、むしろシステム全体で分担購入して、システムとしての所蔵タイトル数を増加させようとする方針をとるシステムもある。ニューヨークなどはその一例である。この場合、相互貸借制がきわめて円滑に機能しているという前提条件が満たされていなければならない。尤もカーノフスキーは、相互貸借サービスでは最高水準に達しているシカゴ市ですら、年間の利用の90%は各館の蔵書に向けられ、相互貸借を通じて本館、あるいは他の分館の図書を利用するのは10%でしかない、という論拠のもとに、重複所蔵主義の立場から分布度調査法を実施したのである。

重複所蔵主義によるべきか、分館分担所蔵主義をとるべきか、あるいは本館中心体制を布くべきかをここで論ずることはできないが、各システムが、これらのうちのどの立場をとっているか、あるいはもっと異なった方針で収集しているかを調べるためには、この分布度調査法を使用すべきであろう。その場合、評価は、システムの標榜する方針と、現実の蔵書にあらわれている方針を比較する形でおこなわれなければならない。

最後の2館比較法の評価は比較的単純である。カーノフスキーは彼の方式によって、シカゴ公共図書館とジョン・クレラー図書館を比較し、重複所蔵45%、クレラー単独所蔵28%、公共単独所蔵10%で、公共図書館もさほどひけをとらないこと、両館あわせると83%所蔵となり、シカゴ市としては相当高度の参考サービス能力を有すること、などをあきらかにした。ニューベリーとの比較も同じ方式で、大体同じ結果を得ている。

メリットの方式についてはすでに詳論したのでくりかえさないが、ハーヴァードとニューヨーク公共図書館を比較して、一般には重複指数が低ければ、包摂指数が高くなる傾向があるにもかかわらず、ニューヨークは両指数ともハーヴァードに劣っているという変則的現象をとりあげている。この種の変則性は蔵書規模最小の英語協会図書館に典型的にあらわれている。蔵書規模最大のハーヴァードと比較すると、後者の前者に対する重複率は10.3%、前者の後者に対する重複率は16.7%で、目立った差が認められない。このような変則性は異質の図書館を比較した場合にあらわれるものであり、公共図書館という同一カテゴリーに属する図書館ではこのような変則性によって混乱を生ずることもなく、各館の独自性指数は比較的正しく現状を伝えるはずである。

調査目的の決定から、データの分析評価にいたるまでの手順を諸調査例の中に求めて評論したが、実際の調査でこれらの方法をすべて使用することは不可能である。調査の目的や、許される条件に応じて最も適当かつ必要な方法に絞って、集中的に実施すべきであろう。

4.

1949年1月、ACRLのジュニア・カレッジ部会で、北中部カレッジ・中等学校協会の大学委員会の事務長バーンズ(Norman Burns)は、カレッジ認可基準の図書館関係条項について、協会の方針を説明したが、この中で蔵書評価法の1としてチェックリスト法をとりあげ、その問題点を指摘した。まず、リストは短期間でアウト・

オヴ・デイトになり、アップ・トウ・デイトにするには頻繁な改訂が必要であるが、実際にはこれは容易でない。また、許可を得るために評点をよくしようとして、チェックリストをそのまま購入リストに使い、その購入に主力を注ぐ例もあるが、このために実際のカレッジのプログラムと一致しない蔵書ができあがる憂いもある。こうした問題を指摘しつつ、彼自身はチェックリスト評価法の適用を見合わせるべきかどうかについてはまだ見解がまとまっていないと、結論を保留した。³⁰⁾

おそらく同様の批判が各方面から出されたためであろうが、カーノフスキーは、1953年に発表したチェックリスト法に関する総括的論文の中で、種々の批判を逐一とりあげて、これに対する彼の見解を説明し、改めてチェックリスト法の意義を強調した。本稿をしめくくるにあたって、彼のこの論文に示された論旨を中心にして、チェックリスト法の意義をまとめておきたい[14:466-8]。

カーノフスキーはチェックリスト法に対する批判を次の7項目に要約した。

1. チェックリストは気ままなタイトル選定(arbitrary selection of titles)であり、いずれも同等の価値をもつとはいえず、またリストから漏れたタイトルに、よりすぐれたものが少なくない。
2. 正確さ、権威、読み易さの点ではすぐれていても、地域社会との関係が少ない。
3. タイトルが短期間のうちにアウト・オヴ・デイトになる。
4. 所蔵されている同種のタイトルが、リストに収録されていないために無視される。
5. 相互貸借による利用の可能性が考慮されていない。
6. 貧弱なタイトルしか所蔵していないとの理由で図書館を断罪すべきではない。
7. 特定図書館にとって重要な特殊な集書面が考慮されない。

これらに対するカーノフスキーのコメントによると、まず1の批判は、チェックリスト一般に対してではなく、たとえばStandard Catalogなど、具体的なリストに向けられるべきである。この種のリストは、図書館員と書評家の合作であり、それなりに信頼を置くことができる。このリスト以外のすぐれたタイトルを所蔵していても、チェックリストの妥当性を減ずるほどの意味はもたない。また各タイトルが同等の価値(of equal value)をもたないというが、図書の価値とはつまるところ“特定の目的、あるいは人々に対する価値”であり、その意味

ではあらゆるタイトルの価値は固定的ではないといわねばならない。したがってリスト編纂において決定する価値は、平均的価値にすぎず、同等、不均等を厳しく論ずべき性質のものではない。

2はリスト選定法の問題であり、調査者が機械的にスタンダードなリストを使用するだけにとどめず、地域の事情に合致したリストを選定することによって容易に解決できる。3の批判はよくきくところであるが、刊年が多少古いからといって図書の価値が減ずるものではない。それ以上にすぐれた図書が出版されない限り、10年経過しても価値は殆どもとのままに保たれるであろう。

4の批判は図書の代替可能性を前提としているが、本来図書はユニークな価値をもち、読者は特定の図書を求めて図書館を訪れる。この要求に対して代替物を提供してもある程度以上の満足を与えることはできない。代替物に余り依存しすぎるべきではなかろう。5にいう相互貸借はあくまで図書館サービスの補助的手段であり、“すぐれた蔵書の代理をつとめるもの”とはなりえない。自館の蔵書を評価するのに他館の豊富な蔵書をあてにするのは見当違いである。むしろその場合は、一団の図書館全体をチェックして、各々のウィークポイントを確認し、システムとしてこれを補うべく系統的購入計画をたてるべきであろう。いずれにせよ、“図書館利用の圧倒的部分は、読者の訪れた図書館の書架上に見出されるものに依存している”ことを忘れてはならない。

チェックリスト評価法は、6の言うように蔵書を批判断罪するために行なうのではなく、むしろ蔵書の中の豊かな分野を発見し、これを伸ばしつつ、貧弱な分野を補充していくためのデータを得ることを目的とするものである。また7でいう特殊集書は、チェックリスト法以外の方法で評価してもよいし、その分野のリストを特に選定してチェックしてもよい。一般的なリストを用いることによって、特殊集書が決定的に無視されることはありえない。

カーノフスキーのこの一連の弁明は、チェックリスト法の意義の詳細な再確認であり、提起された批判を十分に論駁している。パーンズの2点に及ぶ批判の後者は、公共図書館では地域性、公共図書館のプログラムなどに転じてあてはめられるが、これもリスト選定法の調整によって解決できることになる。4の批判に対するコメントは、いささか図書のユニークさを強調しすぎたきらいがあるが、原則的には正論である。

ハーシュは、パーンズの批判と、カーノフスキーのこ

の反論を紹介し、さらに Public Library Inquiry, ウェイブルズ＝ラスウェル調査などを参照しながら、チェックリスト法は、比較的新しい、あるいは小規模の図書館では効果が大きい、大図書館、大学・学術図書館ではそれほどの効果を発揮しない、チェックリスト法の価値は大部分、リストの出来具合如何と、データの処理解釈法にかかっている、その運用に十分な注意を払うべきであること、できれば調査の都度、目的に合ったリストを特別に編纂することが望ましい、とのべている[37: 13-4]。

ホイーラーとゴルダーは、スタンダードなリストを使用したチェックリスト法を推奨し、さらに“いくつかの遡及的な、精選された評価のビブリオグラフィー”でチェックして、これらのいずれのリストにも収録されていないタイトルが蔵書中にあれば、それはむしろ廃棄されるべきだとまで主張している。⁸¹⁾ 使用するリストが殆んど完全に編纂されている場合は、これ以外のタイトルはたしかに彼らの言う如く廃棄図書リストに加えられるべきだとも考えられる。廃棄基準の決定は仲々容易ではないが、これも一つの見方として考慮に入れる要があらう。

ウィリアムスは、大学、学術、公共図書館で実施されたチェックリスト調査例を数多く紹介し、特に使用されたリストを詳細に説明しながら、チェックリストは元来、質的評価手段(means of qualitative evaluation)として作成され適用されたが、多館調査ではこの方法を利用しながら、重複所蔵数を発見するための量的調査手段にも用いられているとのべ、カーノフスキー[19]、クルーマン(A. F. Kuhlman),⁸²⁾あるいはメリットの調査例を紹介した[42: 33]。チェックリスト法に関する最も総括的な説明であり、質的評価法が量的評価法へ転用されていることの指摘など、傾聴に値する指摘も見出されるが、彼自身がどの程度に重視しているかは明らかでない。

カーター & ボンクは、蔵書調査には、過去においてはすべて数量化する方法が好んで用いられたが“質の判定を量的表現にかえる”この方法には限度があるとして、現在“最も広汎に使用されている蔵書評価法”としてのチェックリスト法を中心に論じている。彼らは、いかなるリストでも偏向がある、リストに収録されていないタイトルは評価できぬ、リストは特定コミュニティと直接の関係をもたない、経費と時間がかかるなどの批判を取りあげ、かかる困難は、リスト作成者の人員増加による偏向の抑制、リスト外図書は改めてチェックする、コミ

ユニティと関係の深いリストの利用, 問題になる分野に限ってチェックングを実施, などの方法で克服できるとのべて, チェックリスト法を支持した。むしろ彼らとて、この方法が完全なものとみなす訳ではなく、蔵書がリストにどこまで接近しているかを知るための方法にすぎないとして、その他の方法の併用を勧めている。³³⁾

わが国では、チェックリスト法はまだ余り重視されていないようであるが、なお見逃がすべからざる 2-3 の紹介がある。

弥吉光長氏は、“蔵書の評価法”を2分し、ファーゴの主題別配分比率などにみられる数量的方法に対するものとして“標準目録による評価”を第1にとりあげている。氏はまず大学図書館用のショーのリスト、公共・学校図書館用の ALA 目録、ウィルソンの目録による調査評価がしばしば実施されてきたことを紹介し、さらにリーの行なった Public Library Inquiry の調査を“見本法による評価”と呼び、4 種類の標準目録を簡単に説明している。氏はチェックリスト法の難点は殊更とりあげず、蔵書の評価が“重要であるが、あまり行なわれない”現実から、“一種の反省評価”法としての本法の実施の必要性を認めている。³⁴⁾ また特にそれと明記されていないが、氏の、“新稿図書の選択”“図書の選択”(シリーズ・図書館の仕事6)などに掲載されている、中小図書館向の参考図書リストは、チェックングによる評価のためのリストの含みをもっていると考えられる。³⁵⁾

また既述の如く堀内郁子氏は、大学図書館の蔵書評価の6方法の1として本法をとりあげた。氏は、大学図書館では、各専門分野の教官が調査に参加して各タイトルの重要度を決定することができ、また忘却されていたタイトルを想起するきっかけとなるという副次的成果もある、調査作業が比較的容易であるなどの長所を認めつつも、データの処理方法は必ずしも容易ではない、リストは示唆的なものであり、何らの規制力ももたない、リストの選定には十分の配慮が必要である。リストがアウト・オブ・デイトになりやすい、リストに収録されていないタイトルが評価されない、各大学共通の“中核となる重要資料”のリストでチェックすると、大学の特殊性を無視し、さらには蔵書を既成品化・規格化するおそれがある、などの問題点を指摘し、ハーシュと同様、新設図書館、小図書館では有効であるが、大図書館では利用価値が少ない、と評している。³⁶⁾ これまでにあらわれた各種の批判を網羅したような総合的批判であるが、その多くはすでにカーノフスキーのコメントで解決されている

といえよう。データ処理法の困難さは、調査例を重ね、集計法、分析評価法を研究し定式化することによって解決されるべきである。

高橋重臣氏は、大学図書館の機能は、大学自体の教育・研究両機能に直結しており、研究機能を果たすためには、その大学の最大特徴をなしているような学科ないし講座では、その特色を一層強化するために、関係分野の“完全無欠なコレクション”を形成するよう努力すべきであるとのべ、種々のビブリオグラフィーによる蔵書のチェックングが必要であるとし、また教育機能を果たすためには、アメリカのパータラン、ショー、あるいはマックニックらのリストの如き“大学教養課程標準図書目録”を編纂して、同様にチェックすべきであると主張している。氏によれば、チェックリスト法は、少なくとも“蔵書構成におけるバランスの欠如の自覚をうる”に、少なからず寄与する調査法である。³⁷⁾

以上の各種の見解をまとめると、チェックリスト法の意義は大体次の11点に要約できる。

1. 蔵書中の重要な欠落タイトルを発見できる。
2. 妥当性、信頼性、実用性ともにそなわったリストを使用すれば、所蔵数、所蔵率を算出して、リストのカバーする分野の蔵書の充実度を知ることができる。
3. 各部門別、あるいは図書の種類別にチェックすれば、蔵書中の充実した分野とウィークな分野を発見することができる。
4. 地域社会のニーズを要素分析し、各要素別に標準リストを作成してチェックすれば、地域ニーズの充足能力を測定することができる。
5. 異なった水準のタイトルから成るリストを使用すれば、蔵書の水準構成を分析することができる。
6. 2館の蔵書の充実度を比較することができる。
7. システム調査により、図書館システム全体の蔵書の充実度が評価できる。
8. システム内の分布度分析により、共通蔵書構成方針、収書分担方針、地域ニーズ対応方針など、種々の収書方針の実現度をしることができる。
9. 複数システム調査により、各システムの蔵書構成の特質が確認できる。
10. 広域調査により、蔵書規模、奉仕人口、図書館費(図書費)、その他の諸条件と所蔵率の関係を知り、公共図書館一般の図書選択方針への示唆を得ることができる。
11. 包摂指数、重複指数、独自性指数などから、各館の

位置づけが可能となる。

以上の11点には、質的評価と量的分析の両面を混在している。カーノフスキーはチェックリスト法を質的評価法とみなし、一般にもそう解されているが、実際にはウィリアムスの指摘するように、量的分析への応用、あるいは自動的移行がおこなわれているので、私はあえてこの両面を分離せず、チェックリスト法のもつ意義をすべてとりあげた。本稿全体を通じて、チェックリスト法の全容を描き、その可能性をできるだけ詳細に把握する方針を貫いたため、意義の評価もまた多面的にならざるをえなかったのである。

チェックリスト法は、所詮、図書館蔵書の分析評価のための1方法にすぎない。しかもそれは、リスト所収タイトルというサンプルによる調査であり、この方法ですべてを評価しようと考えすることはできない。諸家様に注告しているように、他の分析評価法によって不足部分を補いつつ、より正確忠実に蔵書を分析するよう心しながら、この方法を応用していくべきであろう。しかしそれにしても、チェックリスト法自体の方法が具体的に整理されていなければならない。本稿では、特に公共図書館に場を限定して、チェックリストによる蔵書の分析評価の具体例を、可能な限り広汎に調べ、特にこの分野で多くの成果をあげたカーノフスキーの調査例、方法論を中心に、チェックリスト法のあらゆる側面を分解し、定式化のための要素として再構成すべくつとめた。しかし現段階ではまだ最終的な定式を確立することは不可能である。今後の実際の調査への応用を通じて、これらの要素が更に整理され、最終的な定式が定着されるはずである。

最後に、私はわが国の、殊に公共図書館におけるチェックリスト調査例の有無を知らぬままに本稿をまとめた。もしその実例があればお知らせ願えると幸いである。また、統計学や調査法の基礎的知識ももたず、チェックリスト法のみに限って調べたので、調査統計関係に詳しい人からみると、冗長にすぎ、あるいは誤まった論断を下している部分も少なからずあることと思う。御批評を仰ぎたい。

- 1) [] 内の数字は参考文献リストの番号とページを示す。以下同様。
- 2) 本質的価値と相対的価値の相違については、ウェラーが詳論している (Wellard, James Howard. *Book selection; its principles and practice*. London, Grafton, 1937, p. 92).

- 3) 堀内郁子. “大学図書館蔵書論,” *Library science*, no. 2, 1962, p. 20-22. Cf. Tauber, Maurice F., et al. *The Columbia University libraries*. New York, Columbia Univ. Press, 1958. p. 260-1.
- 4) Wellard, *op. cit.*, p. 160-2.
- 5) Mudge, Isadore Gilbert. *Guide to reference books*. 5th ed. Chicago, ALA, 1929.
- 6) Shaw, Charles B. “The compilation of ‘A list of books for college libraries,’” *Library quarterly*, vol. 1, Jan. 1931, p. 72-8. このリストは2分冊からなる予備版であったが、翌1931年、ALAが改めて同じ書名で出版した。
- 7) Randall, William M. *The college library; a descriptive study of the libraries in four-year liberal arts colleges in the United States*. Chicago, ALA & Univ. of Chicago Press, 1932. p. 1-4, 85-105.
- 8) Hilton, Eugene, ed. *Junior college book list*. Berkeley, Univ. of California Press, 1930. (*University of California publication in education*, vol. 6, no. 1).
- 9) National survey of the education of Teachers. (U. S. Office of Education, *Bulletin*, no. 10, 1933. “Special survey studies”) vol. 5, pt. 4. “Library facilities of Teachers Colleges,” Washington, D. C., Govt. Print. Off., 1935.
- 10) Hester, Edna A. *Books for junior colleges*. Chicago, ALA, 1931.
- 11) Raney, M. Llewelyn. *The university libraries*. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1933.
- 12) この調査は、同クラブが連邦政府の補助を受けて主催し、シカゴ図書館学部に調査実施を依頼し、調査の経験をもつカーノフスキーが担当することになったものである。(Cf. Schlipf, Frederick A. “Leon Carnovsky; a bibliography,” *Library quarterly*, vol. 38, Oct. 1968, p. 432. Haygood, William Converse. “Leon Carnovsky: a sketch.” *Ibid.*, p. 425.) なお、この調査の実施年度については聊か問題がある。カーノフスキー自身は、調査結果の報告 [1, 2: 262] においては、1934年1月に同クラブから依頼を受けたと書いているが、のちに回想しているところによると1933年とされている [14: 463]。何れが正しいかを決定する直接の手掛りはないが、次に紹介するイリノイ州立図書館の調査と比較すると、ある程度事情が推測できる。すなわち、イリノイ州立図書館は1933年に全州的調査を実施したが、この時使用したリストの中には *Booklist*, 1933が入っている。これに対してカーノフスキーは1932年版の *Booklist* しか使用していない。このことから、カーノフスキーの調査は、イリノイ調査と殆んど時期を同じくしながら、僅かに早く実施されたものと考えられる。彼が1934年1月と明記したのは、おそらくクラブからの正式の依

- 頼の時を言うのであって、実際の調査はすでに1933年に着手されていたとみるべきであらう。この年、シカゴ図書館クラブはシカゴ地区の図書館名鑑を編纂しているので、その事業の一環、または延長として首都圏調査を企画したものと考えられる。(Cf. Chicago Library Club. *Directory of libraries of the Chicago area*. Chicago, Chicago Library Club, 1933).
- 13) Illinois State Library, Library Extension Division. *Reference collection for small libraries*. Illinois State Library, 1933, (150 タイトル所収)
- 14) レファレンス図書のリストに使用したものは、カーノフスキーの使用したものと同じで、同館対外活動部の編による。その他の二つのリストも同部が編纂発行していたものである。
Children's books for home and school libraries. 1933.
Essential titles for the librarian's professional shelf. 1933.
- 15) Vitz, Carl. "A Jolt for librarians," *Bulletin of the American Library Association*, vol. 30, Sept. 1936, p. 897-98.
- 16) *Standard catalog for public libraries*. New York, Wilson, 1934.
- 17) Shores, Louis. *Basic reference books; an introduction to the evaluation, study and use of reference materials with special emphasis on some 300 titles*. Chicago, ALA, 1937.
- 18) *Graded list of books for children*, comp. by a Joint Committee of the ALA, the National Education Association, and the National Council of Teachers of English, 1936.
- 19) Walter, Frank Keller. *Periodicals for the small library*. 4th ed., rewritten and enl. Chicago, ALA, 1924.
Lyle, Guy R. *Classified list of periodicals for the college library*. Rev. ed. Boston, Faxon, 1934.
- 20) *Encyclopaedia of the social sciences* から、ランダム・サンプル法で選び出した。
- 21) Dutcher, G. M. *Guide to historical literature*. New York, Macmillan, 1931. Section J. "Contemporary Times, 1871-1930" を適用した。
- 22) 煩瑣にすぎるので、各リストのタイトルに簡略化して書いた。
- 23) ロスアンゼルス主題別部門は次の11部門からなっている。
主題部門——文学語学, 哲学宗教, 社会学, 教師児童, 科学産業, 美術音楽, 歴史, フィクション
その他——定期刊行物, 外国語, 市政参考 (*Organization, Administration, and Management of the Los Angeles Public Library*. vol. 3, Central Library, ed. by G. A. Terhune, Lowell Martin and others, p. 9-10).
- 24) 分館の15の論題とタイトル数は次の如くである。
1. アメリカ史(29), 2. 自由(26), 3. 経済(53), 4. 消費生活(15), 5. 宗教(26), 6. 人種(138), 7. 教育家庭(28), 8. 労働(53), 9. 科学技術(255), 10. 健康(178), 11. 文学(96), 12. 写真(28), 13. 食物育児(27), 14. 欧州再建(27), 15. 民主社会と科学(14)。
- 25) ウイルソンは1942年まで10年間シカゴ大学図書館学校長をつとめたのち、同大学を停年退職し、古巣のノース・カロライナ大学の図書館長に復帰していた。
- 26) 9州とは、アラバマ、フロリダ、ジョージア、ケンタッキー、ミズーリ、ノース・カロライナ、サウス・カロライナ、テネシー、ヴァージニアである。このうち蔵書調査に回答を寄せたのは、アラバマ、フロリダ2州を除く7州の180館である。
- 27) 標準ノンフィクションは、調査の際は "standard non-fiction titles in the field of public affairs" と "how-to-do-it titles" に区分して、二つのリストとして発送しているが、集計の時はこれを統一して "standard non-fiction" とした。ここでは集計の時の分類に従った。
- 28) ロスアンゼルス調査は次の4類型各々の所蔵タイトル数をあげている。
I. Popular Titles: 一般的な、割に軽い内容の広く読まれているもの
II. Popular-Substantial Titles: 10万部以上発行されている、ある程度実質ある出版物
III. Substantial Titles: 一般的読者に関心をもたれている実質的出版物
IV. Specialized and Research Titles: 科学専門的関心をもつ比較的少数の読者をねらうもの
Organization, administration, and management of the Los Angeles Public Library. vol. 3: Central Library, ed. by G. A. Terhune and others, p. 10-12.
- 29) Downs, Robert B. ed. *Resources of North Carolina libraries*. Raleigh, Governor's Commission on Library Resources, 1965. p. 105-7.
この2リストは、シニア・カレッジ、ジュニア・カレッジ、公共図書館共通のチェックリストとして使用された。附録A, Bとして全タイトルが掲載されている (*Ibid.*, p. 157-176)。
- 30) Burns, Norman. "Accrediting procedures with special reference to libraries," *College and research libraries*, vol. 10, April 1949, p. 157-8.
- 31) Wheeler, Joseph L. and Goldhor, Herbert. *Practical administration of public libraries*. New York, 1962, p. 478.
- 32) Kuhlman, A. F. *The North Texas libraries*. Nashville, 1943.
- 33) Carter, Mary Duncan and Bonk, Wallace John.

Building library collections. 3d ed. Metuchen, 1969. p. 134-7.

- 34) 弥吉光長. 図書の収集と選択法 <日本図書館協会編. 図書館ハンドブック. 増訂版. 東京, 1960> p. 200-1.
- 35) 弥吉光長. 新稿図書の選択. 東京, 理想社, 1961. p. 223-229.
- 弥吉光長編. 図書の選択. 東京, 日本図書館協会, 1968. p. 159-73. (シリーズ・図書館の仕事6)
- 36) 堀内, *op. cit.*, p. 21.
- 37) 高橋重臣, “大学図書館の蔵書構成,” *図書館学会年報*, vol. 12, no. 1, 1965. 8, p. 36-9.

参考文献

カーノフスキーのチェックリスト法

関係文献

1. “Inequalities revealed in Chicago metropolitan service,” *Library journal*, vol. 60, no. 3 (Feb. 1, 1935), p. 93-4.
2. “Public library book collections,” *Library quarterly*, vol. 5, no. 3 (July, 1935), p. 261-88.
3. “Book collection, library expenditures, and circulation,” *Library quarterly*, vol. 6, no. 1 (Jan., 1936), p. 34-73.
4. (With Edward Allen Wight), *Library service in a suburban area: a survey and a program for Westchester County, N. Y.* Chicago, ALA, 1936.
5. (With Edward Allen Wight) “Reply to ‘A word about the Westchester County Library Survey,’” *New York libraries*, vol. 15, (Nov., 1936), p. 136-46.
6. The Evaluation of public library facilities. <Wilson, Louis Round ed. *Library trends*; papers presented before the Library Institute at the University of Chicago, August 3-15, 1936. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1937> p. 286-309.
7. (With A. T. Noon and S. W. Smith) *Report of a survey of the Michigan State Library for the Michigan State Board for Libraries*, May, 1938, on behalf of the American Librarp Association. Chicago, ALA, 1938.
8. Measurements in library services. <Joeckel, Carleton B., ed. *Current issues in library administration*; papers presented before the Library Institute of the University of Chicago, August 1-2, 1938. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1939> p. 240-63.
9. Community analysis and the practice of book selection. <Wilson, Louis Round, ed. *The practice of book selection*; papers presented be-

fore the Library Institute at the University of Chicago, July 31 to August 13, 1937. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1940> p. 20-39.

10. (With C. B. Joeckel) *A metropolitan library in action*; a survey of the Chicago Public Library. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1940.
11. “Self-evaluation: or, how good is my library?” *College and research libraries*. vol. 3, no. 4. (Sept., 1942), p. 304-310.
12. (With Lowell A. Martin and George A. Terhune) *Objectives of the library*; appraisal of book collections. (*Organization, administration, and management of the Los Angeles Public Library*, vol. 2) City of Los Angeles, Bureau of Budget and Efficiency, 1949.
13. *The Public libraries of Greensboro*; a survey, Dec. 1-6, 1952.
14. “Measurement of public library book collections,” *Library trends*, vol. 1, no. 4. (April, 1953), p. 462-70.
15. *The Mansfield Public Library*; a survey and a program. 1954.
16. “Public library survey and evaluation,” *Library quarterly*, vol. 25, no. 1. (Jan., 1955), p. 23-36.
17. *The Vancouver Public Library*; report on a brief survey. Chicago, Public Administration Service, 1957.
18. “Evaluation of library services,” *UNESCO bulletin for libraries*, vol. 13, no. 10 (Oct. 1959) p. 221-25.
19. *The St. Paul Public Library and James Jerome Hille Reference Library*; a study of co-operative possibilities. St. Paul, The Libraries, 1960.
20. *The Racine Public Library*; an evaluation, and a consideration of several problems. Univ. of Chicago, Graduate Library School, 1965.

その他のチェックリスト法

関係文献

21. “Regional Library Conference,” *Illinois libraries*, vol. 17, no. 2 (April, 1935), p. 31.
22. Illinois State Library, Library Extension Division. *Report of the survey of the public libraries of Illinois*. (Supplement to *Illinois Libraries*, vol. 17, no. 2, April, 1935).
23. Waples, Douglas and Lasswell, Harold D. *National libraries and foreign scholarship*; notes on recent selections in social science. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1936.
24. Waples, Douglas. *Investigating library problems*. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1939.

25. Martin, Lowell. "Public library provision of books about social problems," *Library quarterly*, vol. 9, no. 3, (July, 1939), p. 249-72.
26. Downs, Robert B. *Guide for the description and evaluation of research materials*. Chicago, ALA, 1939.
27. McDiarmid, Errett Weir, Jr. *The library survey; problems and methods*. Chicago, ALA, 1940.
28. Merritt, Le Roy. Resources of American libraries; a quantitative picture. <Downs, Robert B. *Union catalogs in the United States*. Chicago, ALA, 1942> p. 58-91.
29. Kuhlman, A. F. *The North Texas Regional Libraries*. Nashville, Peabody Press, 1943.
30. Eaton, Andrew J. "Current political science publications in five Chicago libraries; a study of coverage, duplication, and omission," *Library quarterly*, vol. 15, no. 3. (July, 1945) p. 187-217.
31. Egan, Margaret. *Survey of the Saginaw Library System*. Chicago, 1947.
32. Connecticut. Education Department. Research and Planning Division. *Connecticut library survey*, by Edward A. Wight and Leon Liddell. The Department, 1948.
33. Wilson, Louis Round and Milczewski, Marion A. *Libraries of the southeast; a report of the southeastern States cooperative library survey, 1946-1947*. Chapel Hill, Univ. of North Carolina Press, 1949.
34. Leigh, Robert D. *The public library in the United States; the general report of the public library inquiry*. New York, Columbia Univ. Press, 1950.
35. Leigh, Robert D. "The Public library inquiry's sampling of library holdings of books and periodicals," *Library quarterly*, vol. 21, no. 3 (July, 1951), p. 157-172.
36. Harwell, Richard. *Research resources in the Georgia-Florida libraries of SIRF*. Atlanta, Southern Regional Education Board, 1955.
37. Hirsch, Rudolph. Evaluation of book collections. <Yenawine, Wagne S. ed. *Library Evaluation*. Syracuse, Syracuse Univ. Press, 1959> p. 7-20.
38. Wezeman, Frederick and Rohlf, Robert H. *Hopkins Public Library, Hopkins, Minnesota; a survey and recommendation for future development and planning*. 1962.
39. Chait, William and Warnecke, Ruth. *A survey of the public libraries of Ashville and Buncombe County, North Carolina*. Chicago, ALA, 1965.
45. Chait, William and Ake, Robert S. *A survey of the public libraries of Norwalk, Conn.* Chicago, ALA, 1966.
41. Downs, Robert B. *Resources of Missouri libraries*. Jefferson City, Missouri State Library, 1966.
42. Williams, Edwin E. Surveying library collections. <Tauber, Maurice F. and Stephens, Ilene Roemer, ed. *Library surveys*. New York, Columbia Univ. Press, 1967> p. 24-32.